戀の傳說

始

特106
668

戀の傳說

大正
5. 9. 26
内交

木村恒君の『戀の傳說』

ワグネルは其大樂劇の世界を、概ね幽界に置き、常に現世を超越せんとするに力めたものだ。有名なる「タンホイゼル」でも、「ニブルンゲン・リングス・リード」でも、皆な爾うである。世界を現世に置けば、如何に現代に超越せんとしても、兎角構想の範圍が、現世の約束に縛られて現代に即し、天馬空を駈けるの自由を得るに難いと考へたからだ。ワグネル樂の滯礴たる氣分は、全く斯くの如くにして作り出されたものである。沙翁が好んで劇の世界を過去の歷史或は外國に置いたのも、現在の位置に卽して構想の自由を失はん事を恐れたからである。

カーライルの眞摯主義、ニーツエの超人說、オイツケンの人生哲學、

ベルグソンの直覺哲學、將又、簡易生活、森林生活などいふ新らし氣に見へる諸般の所說の、約言すれば「野蠻に歸れの」一句に盡きるものだ人は古きに遡り野蠻に歸つて玆に初めて現代の約束より脫し、自由の怡樂を味ひ得らるゝものである。人若し現代に超越せんとせば、須らく野蠻に歸るべきだ。人の苦痛は、現代に卽すべく餘義無くせらるゝにある

されば乙て利は素より現代に卽する處にある。人は現代より離れて一日も生き得らるべきもので無い。然し、樂みは現代を離れて利を忘るゝところにある。戀の樂みも亦利害を無視して現代の約束を忘るゝところにある。否な、ワグネルの大樂劇に於けるが如く、現世をさへ離れて、人界を其眼下に睨睥する處に戀の享樂はあるのだ。情死に無限の意義ありとせらるゝのも、實に之が爲めである。

「傳說」とは英語に所謂ミソロヂーとフェアリー。テールとを扱き交せたものである。ミソロヂーは現代を離れて野蠻の古きに歸つたもので、フェアリ。テールは現世を超越して幽界の消息を漏らすものである。其處には現代の約束が無い。たゞ自由あるのみだ。怡樂あるのみだ。現代の約束に縛られた不徹底な戀を物足らなく感ずる男女が、戀の傳說に憧憬するは情の自然だらう。

友人木村恒君が「戀の傳說」を著して之を上梓する所以は、現代の約束に苦められて悶き悲む現代男女の斯の憧憬に應じ、之に怡樂を與へんとするにある。併も、斯くの如く現代と現世とに超越せる福音を現世現代の男女に傳へ、其の憧憬に遺憾なからしむる斯くの如き著作は、篤學木村君の如く、達文木村君の如くにして初めて僅に遂げ得らるゝ事業で

予の如き假令之を企つるも、到底能はずとする處のものである。

大正五年初秋

元祖戀愛本家
煩悶引受所長　青柳有美誌

序に代へて

これは私が仕事の餘暇に特殊の興味をもつて書き綴つたものです。この他にも戀に關した傳說はまだ〳〵澤山有ることゝ思ひますが、成可く色彩の異つたものをと望んでこれだけ集めて此一編を作りました。私の生んだ最初の著述です。

附錄は特に四方堂主小川正次氏から、私の初めての事業にお力添えの爲めに寄せられたもので、特別面白いものばかりです。

御多忙中に拘らず本書の爲特に序文をお送り下さいました青柳有美先生に對し茲にお禮を申上げます。

大正五年九月

著者しるす

戀の傳說　目次

松前乙女……函館……一
むじなの戀……出羽……七
花子塚……常陸……一五
百尋わかめ……常陸……一九
耳切屋敷……常陸……二五
龍神の戀……武藏……三五
お八重ケ淵……上野……四三
にごらず湖……上野……五一

鳴かずの池……上野……五九
富士姫の命……下野……七一
絹沼……下野……八三
原風……加賀……八九
蛇ケ淵……信濃……九五
永い戀……信濃……一〇一
人魚塚……越後……一〇七
杢太ケ池……越後……一一七
片葉の蘆……越後……一二五
姫名草……佐渡……一三三

乙女塚……摂津……一三七
箸墓……大和……一四三
女郎花塚……大和……一四七
吉祥姫……出雲……一五一
推惠神社……出雲……一五七
種ケ池……因幡……一六三
愛姫……伊豫……一七一
蛙岩……熊本……一七七
蛇の執念……筑前……一八三

附錄

稚兒ケ淵……相模……一八九
小石供養……武藏……一九一
夜泣石……遠江……一九三
宇治の橋姫……山城……一九五
片目魚……攝津……一九七
七輿山……上野……一九九
鴻の巢社……下總……二〇一
女男松原……上總……二〇三

河古耶の松……羽前……二〇五
腰掛の松……岩代……二〇七
姉沼妹沼……陸奥……二〇九
嫁が淵……飛驒……二一一
海女乙女……越後……二一三
黃金の鷄……長門……二一五
榮華の跡……因幡……二一七
山姥……出雲……二一九
那智の瀧壺……紀伊……二二一
乳母櫻……伊豫……二二三

百椀どぶろ……日向……二二五
鯡の祖神……渡島……二二七

——目次終り——

戀の傳說

木村恒著

松前乙女（函館）

松前の乙女は船頭の袖に取り縋つて賴んだ。

「どうぞお願ひです。あなたの船が忍路の方に行くと聞いたので、取るものも取り敢へず出て來たのです。どうぞ妾を一緒に乘せて行つて下さい。」

船頭は目を丸くして、乙女のこの無謀の願事に驚ろいた。

「わりやまあ何をたわけた事を抜かすのかい。何んで女が忍路へ渡れるものか。」

「否、否、女でも一生懸命になれば屹度大丈夫です。屹度渡れます。」

「そりや駄目だ。お主はまだあの恐ろしい雷電峠沖の、神様のことを知らぬと見えるな、」

「否、否、それも知つてゐるのです。けれど妾はよし其所で神様のお怒りにふれて、海の中に死んでも構ひません。もう此地に只一人、戀ひしい人と別れて居ることは、とても辛抱が出來ないのです。」

「馬鹿の事を云ふものでない。お主の生命はいらんとて、我等

船頭は皆生命が欲しいわ。ワハ、、、。」

てんで船頭は乙女の言葉に相手になつては呉れなかつた。乙女は松前の者であるが、戀ひしい男が止むを得ない用事で、忍路高島の方へ旅をしたので、其後に一人殘つて男の歸りを待つてゐたが、もう待ち切れなくなつて、忍路の方へ行く船があると聞いて飛んで來たのであつた。そして其船の船頭に便乘を願つたのである。

船頭も乙女の胸の裡を哀れに思つた。けれども是ればかりは願ひを聞き届けてやるわけに行かなかつたのである。

何故、と云つて、松前から忍路の方へ行くには、どうしてもあの北海道後志國の西の方にある雷電峠を越さなければならな

い。然し陸路で雷電峠を越さうとすれば、其山中には恐ろしい熊や狼が居て、人を見れば直ぐにも飛びついて餌食にせずにはおかないから、どうしても、松前から船でこの雷電峠の沖を乗り切らなければならなかつた。けれども其沖には恐ろしい神が居て、若し船に女が乗つてゐれば、荒い北海の浪をいよ〳〵荒して俄かに暴風雨を巻き起して船を浪の底に沈めずには居ないそれ故昔から一度も此沖を、女を乗せて無事に乗り切つた船は一艘もなかつた。

船頭はそれを恐れた。可哀相だとは思つたが、生命を捨てゝまで、乙女の願ひを聴き届けてやる程の勇氣はなかつた。

よ〳〵と乙女は泣きくづれてゐたが、やがてムックリ頭を

上げると。

「それなら、あの、せめては歌棄か磯谷までも連れて行つて下さいまし。あすこから忍路まではそんなにも離れて居ませんから、此所に居て戀ひしい人の上を思つてゐるよりは、どんなに心強いか知れませんから。」

と涙聲に頼むのであつた。

船頭は流石にそれまで斷るわけには行かなかつた。

「それほどの頼みなら、それぢや船に乗るがいゝわ、其所までは連れて行つてやらうよ。」

乙女は飛び上つて喜んだ。歌棄か磯谷までならば、女を乗せても船は雷電峠の沖を通らないで濟むのである。

船頭たちは皆この哀れな情の濃い乙女の胸の裡を哀れんだ。

そして、やがて、誰の口からともなく、

忍路高島及びもないが
せめて歌棄磯谷まで

と唄ひ出した。今も彼地の船頭はその唄をよく唄つてゐる。

むじなの戀（出羽）

「お前さん聞きなすつたか、あの白羽の矢のことを。」

「聞いた、聞いた。まあ飛んでもねえことが出來たもんだなあ

あすこの家ぢやたつた一人の娘だあに。あの娘を人身御供に取

られることぢや、父さんやお母も一緒に死にてえ位だらう。」

「ほんとにより。まだ十七の、漸く咎がふくらみかけたところだ

あに。可哀相にのう。」

「ほんとに可哀相だ。だけれど神社の主が見込むのも無理ねえ

程綺麗な娘だなあ。」

「さればさ。それほど綺麗な娘だから尙更可哀相でならねえと云ふものだ。」

「まつたくよなあ。」

村の者がこんな話をしながら、村一番の豪家の白壁造りの土藏に夕日の照つてゐるのを見て通り過ぎた。

白羽の矢、白羽の矢と云つて、村では二人の人が寄るともう此話が出て、誰も彼も哀れな人身御供に上げられなければならぬ豪家の娘の身の上を氣の毒がつた。

この村は出羽の國の置賜と云ふ郡にあつて、高安村と云ふのであつた。四邊の土地は碌々耕やされてゐず、泥海のやうな有樣だつたが、この村だけは早くから開けて、人も住み田畑にも

穀物が秋毎に實つた。そして村の人は常に泰平を樂しんでゐた。

けれども、何時頃から始まつたことか誰も知る者とてはないのだが、二年に一度又は三年に一度位、美しい娘のある家に白羽の矢が立つてゐることがあつた。その時は一ケ月の内に、その娘を人身御供として、これも何時頃から有るのか村の老人達も知らぬ神社に、上げてしまはなければならなかつた。若しさうしなければ、田畑は荒されてその秋の穀物は何一つ取ることの出來ぬやうなものばかり實るのであつた。そんな不作が來れば、近所に村と云ふほどの村もない此村では、皆餓死してしまはなければならない。それ故白羽の矢を立てられた家では、爲方がなく、泣く〳〵も娘を人身御供に上げることになつてゐた

のである。

その恐ろしい白羽の矢が、村一番の豪家の屋根に立つたのである。村の若者達は、あすこの娘は天女のやうだと云つて、我こそ婿にでもなつて手活けの花とながめたいものだと、皆して望んでゐたのであつた。その娘がどうしても人身御供に上がらなければならなくなつたのだから、手の内の寶玉を突然奪ひ取られたやうに若者達は落膽した。けれども、神社の主に見込まれた娘だから、村の人々にはどうしても助ける手段がなかつた。

唯徒らに村人が騒いでゐる内に、期間としてある一ヶ月の日はズン〳〵經つて行く。さうしてもう十日も過ぎてしまつた。

その或日、何處から來たのか、飄然とこの村へ入つて來た一

人の盲目があつたが、その盲目は其夜村人にも言はず、唯の一人で、神社のある山へ上つて行つた。すると或途中の岩の上で

「この事ばかりは敎へるな。申斐の國のミケヾとシケヾ。」と繰り返して行者が唄つてゐる唄を聞いて、そのまゝ降りて來て此事を村の人に話した。そして早く、そのミケヾとシケヾを探しに行けと言つた。

「それぢや誰ぞ足の丈夫の者が揃つて探しに行つて呉れ。金は幾らでも出すから。」

と豪家の主人は村人を集めて頼んだ。若者等は皆な進んで行かうと言ひ出した。

「もう何日も日がないんだからな。大急ぎで探して呉れ。」と村

の老人達も僅かの日の間に探し出せればいゝがと心配しながら若者等に勇氣をつけた。

若者等は出て行つた。甲斐の國へ。

やがて歸つて來た若者等の連れて來たのは、ミケヾとシケヾと云ふ二匹の猛犬だつた。そこで娘を入れる箱の中へ、娘の代りに此二匹の猛犬を入れて、その日村人は大勢でその箱を神社のある山へ運んだ。

村人は何れも其夜眠りもせずに箱の中の犬のことを考へてゐた。夜が明けると待ち兼ねて、村の人は皆山へ登つて行つた。

「やあ、何か死んでるぞ。」

と先に立つた一人が驚ろいたやうな聲をあげた。人々は驅け寄

つて行つた。其所には年經つたむじなが死骸となつて横たはつてゐた。猛犬のために食ひ殺されたのであつた。流石の猛犬も傷を受けて氣息奄々としてゐた。

「これで娘は助つた。」

さう云ふ聲がしたので村人が振り返つて見ると、それは例の盲目だつたが、村人が喜び勇んで騒いでゐる時、すつと盲目の姿は阿彌陀如來の御姿に變つて、天上さして昇つて行つた。

「ハヽア。」

と村人一同はその御姿を伏し拜んで、涙にくれた。

そのお蔭で助つた娘は、愛し愛し合つて、生命もお前のためなら要らぬと誓つた喜助と云ふ村の男と夫婦になつた。そして

是迄あつた神社の跡へ、村人は新たに二匹の猛犬を祭つたその神社は今でもある。

花子塚（常陸）

常陸國の筑波山の麓に、利根川に流れ入る小さな川がある。その川口に村がある。或年この村へ何處からか一人の虚無僧が流れ渡つて來た。そして門毎に立つて尺八を吹いて歩いた。

或日のこと、虚無僧は一軒の酒屋の前に立つて尺八を吹いてゐた。主人の清兵衛はその音をきゝつけて、「これ誰か虚無僧に手の内をおやり」と言つたが、相憎く店の者が誰も居なかつたので、娘のお花が駆け出して來て、若干の錢を虚無僧に與へたその時何うした拍手か虚無僧は少し編笠を上げて禮を述べたの

で、その色白の美しい顔がお花の眸に映つた。ハッとしてお花は顔を赤らめながら俯向いた。

虚無僧は尺八を美しい音に吹き鳴らして、やがて去つて行つた。

それからお花は何故かその虚無僧の顔の白さが忘れられなかつた。そして毎日物思ひに沈み切つてしまつた。いつかその心の内の苦しみは母親に訴へられ、父清兵衛の耳にも入つた。

清兵衛は吃驚して、以ての外のことだと酷く怒つた。けれども一圖に思ひ込んだお花の心は動かうともしない。清兵衛もホト〳〵困つた。

けれどもあの虚無僧さへ居なければ、娘も思ひ切つて、その

内には忘れるでせう。」と母親は言つた。清兵衛もそれもさうだと思つた。虚無僧は毎日村を流して歩いてゐた。

そこで清兵衛はある手段を企てゝ虚無僧を村から追ひ出してしまつた。それと知つた時のお花の嘆きは傍で見るも哀れなほどだつた。そして日毎夜毎一人一室に入つて、只泣き明かし泣き暮してゐた。

お花は考へれば考へるほど両親の仕打ちが腹立たしく悲しかつた。終ひには物狂はしくなつて、生きてゐることが詰らなくなつた。生きてゐてもあの虚無僧に逢へぬものなら死んでやると思つた。その思ひは日増しに深くなつて行つた。

とう〳〵お花は物思ひに耐へ切れなくなつて、或日弱色縮緬

のしごきで首を縊つて死んだ。十七だつた。

村人はお花の心情に同情した。そして兩親と相談した上で、川口に塚を作つて其所にお花の遺骸を埋めた。一緒に佛像と石に刻んだ經文とを埋めた。

この塚の周圍を、「ドン〳〵塚々、ドン〳〵塚々、ドン〳〵塚々」と唱へながら廻ると若い娘の姿が現はれる。又塚の傍で尺八を吹くと手も足も痺れてしまふ。

百尋わかめ（常陸）

「折入つての頼みがあるが、お主は聞いて呉れやうか。」

と河の神に向つて男神は問ふた。河の神は不思議げに、

「折入つての願ひとは何ぢや。出來ることなら何でも聞き屆けやう。まあ言ふて見るがいゝ。」

「外でもない、私は川向ふの女神と懇意にしてゐたが、もう倦きた。それで、女神が此方へ來られぬやうにして欲しいのぢや。女神は毎日川を渡つて來る。どうかお主の力で、女神が川を渡れぬやうにして欲しい。いや、川の中で水に沈んで死んでしま

ふやうな工夫をして貰ひたいのだ。」
「ほう、それはやさしい事ぢや。して女神はいつ來るのぢや。」
「いつでも、この私があの呼はり塚に立つて一聲呼べば、いつでも喜んで川を渡つて來る。」
「それなら、今直ぐ呼ぶがよい。川の中で溺れ死ぬやうに工夫してやらう。」
「それでは呼ばうか。」
「早く呼ぶがいゝ。」
男神は川岸の呼はり塚に立つて、川向ふの女神を呼んだ。
男神はもう餘程前から川向ふの女神と戀の情を通じてゐた。女神は毎日川を渡つて男神に逢ひに來た。それが、この頃にな

つて男神は女神を嫌ひ出したのである。もう厭になつたのである。
女神はそんな男神の心は知らなかつた。急にこの頃になつてから餘所々々しくなつた男神の心を只不思議に思つてゐた。時々は疑つて考へることもあつたが、やがて、男の我儘だと強いて打ち消してゐた。
今、女神はその男神から呼ばれたので、いそ〳〵として岸に出た。そして靜かに川を渡りはじめた。
川は那珂川（常陸國）の支流で、涸沼川と呼ばれてゐた。流れは隨分強かつたけれども、女神は川の淺い所を選つては足を運んで行くので、強い流れもさう心配ではなかつた、そして川

の半迄やつて來た。

男神の姿は判然女神の眸に映つた。

「はあ―。」と女神は悦びの聲をあげて男神に呼びかけた。

「おう―。」と男神も手をあげて返辭をした。

その時、急に川の上に霧が蔽ひかゝつて來た。女神は眸の前を霧に閉されて男神の姿が見えなくなつたので、川の中に暫時立ち停つた。

けれども霧は晴れなかつた。一刻毎に深く厚くなつて來て、遂には女神の眸には足下の水も見分けられなくなつた。

「あゝ。あゝ。」

と女神は俄かに心細さに聲を振りしぼりながら、川の中を男神

の立つ岩と思ふ方に渡り出した。けれども、霧の爲めにいつか方向を失つていくら、進んでも岸には着かなかつた。その内に不圖流れに足をさらはれると、深い淵に落ち入つて、そのまゝ流され沈められてしまつた。是は川の神のしたことであつた。

男神はいつか此時は自分の家に逃げ歸つてゐた。

それから暫時經つて、男神は川岸の呼はり塚に立つて川向ふを眺めた。そして不圖眼を下の流れに移すと、流れの底によろ〳〵と、わかめが生えてゐるのが見えた。それは女神の髪の毛から生れたものであつた。そして恰度女神が髪の毛を風にでも振り亂してゐるやうに、男神の眼にはそれが物凄く悲しく映つた。

川の中にわかめの生えるさえ不思議なのに、そのわかめは恐ろしく長く、里人の話では百尋はあるとのことである。

耳切屋敷（常陸）

常陸國の或地方に、清吉と云ふ若者が住んでゐた。只常陸國とのみで何と云ふ地方か、何時の頃か解らぬ。けれども勿論今の時代のことではない。

清吉は美男であつた。その上に非常に尺八を吹くことが上手だつた。

或夜も清吉はそゞろ歩きながら、好きな尺八を吹いてゐた。美しい音は遠く高く夜の空氣をゆるがして流れ渡つた。清吉は自分でも好い氣持になつて、それからそれと知つてゐる曲を吹

き慰んでゐた。

すると何時の間にか一人の乙女が清吉の前に立つてゐた。

そして叮嚀に清吉に挨拶して、かう言つた。

「あの餘り突然で大變ぶしつけでは御座いますが、今晩わたくしの家に祝事が御座いますので、是非あなた樣のお得意のその尺八をきかせて頂きたいので御座いますが、如何で御座いませうか。」

清吉は吃驚して乙女の姿を見詰めた。まだ一度も逢つた覺えのない乙女ではあつたが、一目見ると、その美しさに打たれてそれを拒むのは惡いやうな氣がした。

「人樣に吹いてお聞かせする程ではありませんが、私でいゝのでしたら參りませう。」

「是非あなた樣でなければなりませんので、どうか御出で下さいまし。」

「ぢや參りませう。」

「どうも有難う御座います。こんな嬉しいことは御座いません。」

乙女はいそ〳〵と清吉を案内した。

そこは立派な屋敷だつた。銀燭輝く奥の大廣間には、大勢の賓客が居流れてゐて、今酒宴の眞最中らしく、賑やかに華やかにざわめいてゐた。清吉の前にも早速馳走が並べられた。

「さあどうぞお得意のものを一つお聞かせ下さいまし。」

乙女は頻りに清吉に迫つた。清吉は言はれるまゝに得意の曲を

數々吹き出した。

「まあ、何と云ふ美しい音でせう。」

乙女は恍惚と美しい清吉の顔に見とれて聞いてゐた。清吉の胸は得意に慄えてゐた。

不圖清吉は餘り長座してしまつたのに氣がついた。

「これは大變お邪魔いたしました。もうお暇いたします。」

「まあ、それでは門までお送りいたしませう。」

「もう此所で澤山です。どうぞお引き取り下さい。」

「では左樣なら。どうぞ明晩も屹度御出で下さいまし、お待ちいたして居りますから。」

清吉は醉つた心地で家に歸つた。

それから清吉は毎夜乙女の家に行つた。勿論尺八を携へてゞあつた。

隣りの人は此頃の清吉が、毎晩家を明けるのを不思議に思つた。どこへ行くのだらうと考へ出すと、どうも凝としてはゐられないやうな好奇心が起つて來た。

「今夜は一つ隨けて行つてやらう。」

隣りの人は其夜清吉の後をつけて行つた。

清吉は大きな寺の門から中へ入り、奥の墓場に行くと、或墓の前に坐つて、しきりに尺八を吹き出した。

翌朝隣りの人は清吉を訪ねて來た。

「オイ清吉さん、お前確りしなくつちや不可ないよ。毎晩お前

は何處へ尺八を吹きに出掛けるんだい。」
「知つてるのかい。どうも美人の頼みだから斷り兼ねて。」
「オイ〳〵、お前は墓場で昨夜尺八を吹いてゐたよ。」
「えッ。」
「確りしなけりや終ひに取り殺されるよ。死人の靈に惚れられてゐるんだ。」
「そりや大變だ。どうしたら可からう。」
「あの名高い修驗者に頼んで見るがよからう。」
「それぢや早速行つて頼まう。」
清吉は修驗者の所に來て事情を話し、そして助けを頼んだ。
修驗者は早速叮嚀に祓ひをして呉れた。それから、清吉の體中

へ隙き間なく呪文を書いた。
「かうしておけば魔も近寄ることは出來ぬ。」
「難有う御座いました。」
清吉は喜んで家に歸つた。そして其夜乙女の所に行かなかつた。
凝と家の中に坐つてゐた。
その時清吉を待ちあぐんだ乙女が訪ねて來た。が、清吉の變つた心持を知り、體一面に書かれた呪文を見ると、
「まあ、あなたは何と云ふ無情の人だらう。」
と悲しげに怨めしげに清吉を見詰めてゐたが、突然清吉の體につかつと近寄ると、
「まだ一個所、あなたの體で連れて行かれる所がある。」

と叫ぶと、いきなり清吉の兩方の耳を摑んだ。

「ア、何をする。」

「呪文の書いてない此耳、だけは、わたしが連れて行く。」

「連れて行かれてなるものか。」

二人は兩方から一生懸命に爭つた。

遂に清吉の耳は斷れてしまつた。

「さあ此耳を連れて行つてやる。」

乙女は清吉には見返りもせず其兩つの耳を持つて、さつさと何處ともなく出で去つた。

清吉は兩耳の跡から淋漓と血を流して其所へ倒れた。何處から

か悲しげに笑ふ乙女の聲が聞えた。

人は清吉の此の家をそれから、「耳切屋敷」と呼ぶやうになつた。」

龍神の戀（武藏）

「何をぐづ〳〵してゐるのさ、今日はお前辨天様へお詣りするんだよ。そんなに叮嚀にお化粧しなくもいゝぢやないの。」と母親の急き立てるのも空耳に、娘はゆつくり身仕度をして漸く立ち上つた。

娘は美しかつた。池の端の金丹屋の娘と云へば、その頃江戸の市中でも評判の美しい娘だつた。母親は何よりもそれが人への自慢だつた。金丹屋は藥屋である。

世は恰度德川の代から新らしい代に變らうとしてゐる時で、

何となく騒がしかつたが、金丹屋にばかりは何の心配もなく、娘は美しい上に、商賣は毎日繁昌した。

「さあ行きませう、どうもお待ちどほさま。」

と娘は鏡に自分の姿を映して、つくゞと見とれてゐたが、漸く思ひ切つたやうに斯う云つて母親の先へ立つた。

「大變綺麗に出來たね。」

と母親は嬉しくつて耐らぬと云ふやうに娘の後から呼びかけていそ〳〵と出掛けた。

母娘は池の端をグルリと一廻りして、不忍池の辨天様にお詣りした。母親は娘に好い婿の出來ますやうにと、澤山のお賽錢を奉げて一心に祈願をこめた。

「さあお前もよくお願ひしなさい。」

「アラ、わたし何もお願ひすることがないの。」

「まあ、そんなことを云ふものぢやありませんよ。早く好いお婿様の來るやうについてお願ひするんだよ。」

「まあいやだ。そんな事を云つて、辨天様が笑ふは。」

それでも娘は母親と並んで、白い美しい手を合せた。

「まあ蓮の花がきれいだ。」

娘はそゝつかしく拜んで、さう云つて池の縁へ馳け寄つた。

「お前あぶないよ。」

母親は娘のすることが一々心配でならなかつた。

「だつて蓮の花がきれいなんだもの。」

「あんまり池の端へ寄るとあぶないからさ。」

二人はそんな事を爭ひながら、緑の松の根元に蹲踞んで、池の蓮をあれこれと指差し、本郷臺の方の岡の景色を眺めたりしてゐた。

その時どうしたのか、娘の身はズル〳〵と池の中へ引き込まれて行つた。

「アレ〳〵、母さん。」

「まあ、お前どうしたの。アレ、どうしたの。」

母親は一生懸命娘の手を握つて引張つたが、何に引かれるのか、娘の身は恐ろしい力でズル〳〵池の中へ引き込まれて行くので、纖弱い母親の力ではどうすることも出來なかつた。見る〳〵娘

の姿は池の水底深く消えて行つた。

母親は狂氣のやうになつて家へ驅けもどり、人々を呼んで再び池の所に引き返し、岸をさぐり、舟を賴んで池中くまなく探し尋ねたが、終ひに娘の姿は見つからなかつた。

「仕方がない。これは池の主の龍神に見込まれて、そのお嫁にとられたのだ。」

と云つて、人々も遂々手を引いてしまつた。

力も拔け切て、母親は此日を娘の命日と定めた。そして命日毎に、毎度赤飯をつくつて重箱へつめ、池の中へ投げ込んだ。投げ込まれた重箱は水の上で、クル〳〵と廻り渦を卷いて、だん〳〵底深く沈んで行くのが常だつた。

「あゝ、それでも娘はあの赤飯が食べられるかしら。」
と母親はそれを見ては泣いた。
引き込まれた重箱はいつまで經つても浮き上らなかつた。
それをせめてもの慰めとして、いつも母親は歸つて行くのだつた。
それから幾年かの月日が經つた。そして不忍池の周圍は次第に埋められ、馬見塲が出來るやうになつた。
かうして段々に池が狹ばめられて行つた或日のことであつた。
池の端に辻待ちしてゐた車夫に、下總の或湖まで行つてくれと頼んだ。一人の美しい女が俥に乘つた。そして湖に着くと、
「わたしは池の端の金丹屋の娘なのだから、金丹屋へ行つてお

金を貰つてお呉れ。この下駄をわたしの印にあげるから。」
と其美しい女は車夫に、自分の履いてゐた下駄の片方を渡した
それと聞いた時人々は、池の底深く捿んでゐた龍神が、捿み難くなつたので、下總へ移つたのだと噂した。それで金丹屋の人々は娘が下總の方の湖へ移つて行つたことを知つた。

お八重ケ淵（上野）

お八重は殿様の非常に深い寵愛を受けてゐた。朋輩達の御殿女中はみんなそれを羨み妬んだ。お八重は多くの朋輩達から羨やまれ妬まれる程實際美しかつた。上州の安中城中でお八重と並ぶほどの容色好しがなかつたばかりでなく、上州中の城主の誰も、お八重ほどの美しい女中を持つてゐる者は多分外にはあるまいと町の人々からも噂されてゐた。

安中城の殿はまたとなき寶のやうにお八重を愛した。何事もお八重のすることは氣に入つた。ちよつとした用事にもお八重

を呼んだ。

それが朋輩達の女中には羨ましく妬ましかつた。

「そりやお八重殿は美人で御座りますよ。けれども箸のころんだ位のことにもお八重、立つからと云つてはお八重、坐るからと云つてはお八重と、一々お八重殿ばかりあのやうに呼び立てるやうならば、わたし達は別に居る必要もないではありませんか。」

「ほんに楓さんの言ひやる通り、わたし達は居ても居なくも同じことの人間で御座ります。蚊でさえも居れば夏の夕暮の風情になるのだと申しますに、わたし達は蚊ほどの用も此城中では役に立たないのでせうよ。ほんとに詰らない。」

「まつたく詰らない。只容色が少しいゝと云ふ位で、お八重殿とわたし達と何處がそんなに異ふのでせう。お八重殿だつてわたし達と同じに、御飯も食べればはゞかりにも行くではありませんか、あゝ考へれば醜い顔に生んだ親が怨めしい。」

女中達は寄ると觸るとお八重の噂をして其惡口を言つた。

さうして朋輩の嫉妬は日に増し烈しくなつた。

お八重の寵愛されるのはそれと反對に益々深く厚くなつた。

朋輩達はもう凝とお八重の愛されるのを見ては居られなくなつた。そして或時四五人の者は寄つて密かに頭を集めた。

「それがいゝ。」

「こんな甘いことはありますまい。」

「それなら屹度殿様もお怒りになるに違ひないと思ひます。」
こんな秘密話が續いた後、女中達は皆自分の受持の方へ行つた。
お八重は殿様に食事を上げる爲めに、その器物を殿様の前に運んだ。お八重は殿様の食事係りと云ふのが表向きの係りであつた。
お八重は美しい手で謹ましやかに御飯を盛つた。その時お八重は顔色を變へて、「アッ」と叫んだ。
「何とした。」と殿様はお八重の顔を見た。その顔は眞蒼になつてゐた。
「何としたのぢや。」
「あの……この御飯の中に針が入つて居ります。」

「何、針が？」
「ハイ。」
「うつけ者奴、もしそれが口中に入つたら何とするつもりぢや。」
「ハイ。」
お八重は茶碗を手にしたまゝ其所に打ち伏して謝罪した。
その時一人の女中は口を切つた。
「まあ何とした大それたことをお八重殿はなさるのだらう。御飯の中に針を入れて、殿様のお生命をおちゞめ申さうとなさるなどゝは、てもまあ恐ろしい企みをなさる人ぢや。」
すると其後について、女中達は口を揃へてお八重が針を入れて殿様を殺さうと企てたのだと言ひ張つた

お八重は吃驚してあらゆる辯解をした。

けれどもそれはきかれなかつた。衆口は終に金も溶かす例の通り、殿も朋輩達の手前に對してそのまゝでは濟まされなかつた。そしてお八重の心も疑はれた。

「お八重をあの蛇と大蛙の入れてある大瓶に投げ入れよ。そして森の中の池に沈めよ。」

と殿は怒りの聲も打ちふるはして命じた。

「お殿様のお言附ぢや。」

「大それた企ての罪ぢや。蛇や蛙にこの白い肌をなめられたり嚙まれたりして死ぬがよい。」

「ほんに自業自得と云ふものぢや。」

各自に女中達は罵りながら、泣き叫ぶお八重を手取り足取り大瓶の中に入れた。瓶の中の蛇や蛙は饑えた咽喉を鳴らし、舌なめづりしてお八重の肌にまつはりついた。

瓶はやがて、安中城の東にある九十九川の川上の、暗い森の中にある名無し池の淵に沈められた。

それから夕まぐれが來ると、暗い森の中の地の底からでも洩れ出るやうに、細い悲しい女の泣き聲が川端を通ふ人々の耳を驚ろかした。或者はたそがれ時のうす闇に、若い美しい女が恨めしげに悄然池の端に立つてゐるのを見たと云つた。

人々はそれらをお八重の靈だと噂した。

誰云ふとなく、それから、之迄の無名し池に「お八重ヶ淵」

と云ふ名をつけた。

にごらず湖（上野）

舟の準備はすつかり整つた、一人の若武士は凡ての用意に落度もないと見ると、奥方に引返して舟の準備の出來たことを報告した。

太守の奥方は大勢の腰元に取り巻かれて立ち出でた。そして舟へと歩みを運んだ。腰元等は皆美しかつた。何れを櫻、何れを梅とも判ぬまで揃ひも揃うて。皆今日を晴れと裝つてゐるので、その美しさは四邊の春景色を奪つて、春秋の花が一時に、人間の姿に化して地上を歩いて行くのかと思はれた。その中に

一際目立つて華やかに美しく人々の眸を曳いたのは太守の奥方であつた。

奥方は今日しも春の一日を、舟遊びに暮して、上州一體を治める殿の威光を四民の上に見せやうと、さてこそは斯く美々しく立ち出でたのであつた。

やがて一行は舟に乘り込んだ。

舟は靜々と波穏かな榛名湖上にすべり出た。舟には目覺むるばかりの小袖の幕を引きめぐらし、中では笛、太鼓、笑ひさゞめきの聲、賑はしくのどかに響いた。周圍の岸の花も樹もこの美しい舟遊びの有樣に氣押されたやうに、聲を呑んで靜まり返つてゐた。湖上にはそよとの風もなかつた。

舟の人々は時の經つのも忘れて、只面白く快く騒いでゐた。そして不圖氣付いて舟を元來た方へ引返し始めた時は、もう花曇りの空が暗く夕暮れそめてゐた。

「船頭急げ。」

と舟中からは空を見上げて供の老女が命じた。船頭は畏まつて腕の力瘤を一層張らして櫓を押した。

「ほんに今日の一日は面白う御座りましたな。わたしは生れて始めてこんな快い日を送りました。」

「わたしとてもこんな嬉しい面白い目をしたのは、今日が始めてゞ御座ります。奥方の美しいあの晴々としたお顔を見てゐるだけでも好い心地ですのに、四邊の景色の美しいことも亦一入

ほんに春も秋も一時に美しい所だけ來たやうな氣がいたします
る。」
美しいと云へば、ほんに今日の奥方の美しさは平生の何倍で
御座りませう。ほんのり櫻色をおびた眞白い顏に、湖水の碧い
水の色が映えて、まつたく天女と申すものはあのやうな美しさ
かと思はれまするわ。」
女中達は一日饒舌つてまだ饒舌りつかれた樣子もなく、こんな
話に夢中になつてゐたが、その内に舟はズン〳〵進んで湖の中
程まで戻つて來た。
その時、どうしたのか、突如奥方の乘つてゐる舟はピタリと
停つて動かなくなつたと、同時に、一天は俄かに黑暗々〳〵に搔き

曇り、波は渦卷いて舟を目掛けては立ち騷ぎ出した。人々は此
不意の天候に驚破一大事、奥方の上に怪我あつてはと驚ろき惶
てる暇もなく、奥方の乘つた舟中から、
「あれッ。」
と一聲、絹を引き裂いたやうな悲鳴が聞えた。と思ふ間もなく
搔き曇つてゐた空は次第々々に晴れ、やがて波も靜まり、湖上
は元の如く平らかになつた。
「やれ〳〵、まあ好かつた。」
「ほんとに、わたしは死ぬのかと思ひました。」
と一同が胸なで下したのは束の間、ふと奥方の舟を見ると、奥
方の姿が見えない。

「おや。」
と叫んで一同は今更狼狽したが、やつぱり奥方の姿は舟の中に見へなかつた。
「あ、これは大變だ。あまりの美しさを湖の主の龍神に見込まれて、奥方は湖の底へ引き込まれたのだ。」
と老女の一人は眞蒼になつて呟いた。一同はまた更に蒼くつて湖の面を見守つた。そして一度にわつと泣き出した。
「このまゝでは殿様に申譯がない。死んでも奥方の行衛を探し出さなければ。」
と、やがて一同は決心の顔を上げると、一度に湖水の底を目掛けて入水した。

その後、榛名湖の岸邊には春が來、秋が訪れ、花も咲き鳥も鳴き、そして冬枯れの頃には岸の落葉が雪のやうに湖の底に沈むが、水はいつも青々と澄みわたり、その底には塵一つも芥一つも見えない。
これは奥方の行衛を尋ねて一度に入水した腰元等が、今も蟹になつて、底の落葉を搔き上げ搔き分け探してゐるからなのである。

鳴かずの池（上野）

與一は上野國の金山の山腹に貧しく住んでゐた。彼は貧しかつたが然し幸福であつた。家には相愛の妻と慈愛深い老母とが居て、彼が一日山野を驅け廻つて獵をして歸ると、その勞れを慰めて呉れた。

その幸福は若し或夏の嵐に吹き荒されることがなければ、永久に續くやうに思はれた。

その夏の嵐は與一に取つても、與一の妻と老母とに取つても悲しい結果を持ち來したのである。山は崩れる、樹木は折られ

る。里の家は飛ばされると云ふ大騒ぎで、與一の家は幸ひに無事であつたが、嵐は山を變へて與一が、獵をする獸を追ひ散らしてしまつた爲めに、與一は何うしても他の國へ出稼ぎをしなければならなくなつたのであつた、それは幸福だつた一家に取つては可成りの重大な悲しい出來事であつた。

「でもまあ、皆の體が無事だつたんだから、それを何よりの幸福と思つて、俺は一稼ぎして來やうよ。」

と與一は決心の臍を固めた。

「知らぬ他國で苦勞させたくはないが、これも一家の者が食ふ爲めには仕方がないでな、體を丈夫にして歸つて呉れよ。」

と老母は涙を隱して言つた。

「待つてますで、なるたけ早く歸つて下されや。」

と妻は物かなしい聲で言つた。

「まあ一ケ月も經てば歸るで、あんまり心配しずと待つてゝ呉れ。」

與一も流石に鼻をつまらした。

けれども、食ふ爲めには一時の別れ位我慢しなければならなかつた。妻も老母もそれを思ふと、もう涙を見せることは出來なかつた。秋の朝日を浴びて旅姿甲斐々々しく出て行く人を、氣嫌好く送らなければならなかつた。

そして與一は旅に出た。

それから毎日々々老母と妻とは與一の事を噂しながら歸る日

を待つたが、初め一ケ月位と言つた與一はなか〳〵歸る樣子もなかつた。

妻は毎日山地を獵り歩いた。その獲物で老母と自分との生活を立てなければならないので、老母をいたはりながら、暇さへあれば彼の女の足は山に向つた。そして良人戀しさに胸をしぼられると、

私やねーえ、ながのりさん、わたしや太田の何ぢやらホイ、
金山そだち、ヨイ〳〵、
外にやねーえ、ながのりさん、外にやきはない、何ぢやらホイ、
イ、まつばかり、ヨイ〳〵、

と唄つた。

家では老母が一人旅の與一を案じてゐた。

「もう約束の一ケ月はとうに過ぎたに、與一は何うしたのぢやらうかな。」

彼の女の顏さへ見れば老母はかう云つて嘆いた。その嘆きの爲めか、それから間もなく老母は、「與一、與一。」と呼びながら、病床に臥す身となつた。

彼の女の働きは前よりも倍も烈しくなつた。老母に藥も買つてやらなければならぬ。自分の食物も買はなければならぬ。與一のことを思はぬではないが、「私やねーえ、」と唄つてなどは居られなかつた。只黑くなつて働かなければならなかつた。

或日彼の女は小銃を肩にして山野を驅けまわつた。けれども

一匹の獲物もなかつた。そして空しく日は武藏野の果てに沈まうとしてゐた。

勞れた足を引きづつて、彼の女は家路に向つたが、獲物の無い寂しさを考へるにつけ、また病母の上を思ふにつけ、今更戀ひしさのつのるのは與一の上であつた。

「あゝ、こんな時家に與一さんが居て呉れるんなら、足の勞れも直ぐ忘れるんだのに。」

さう思ふと、與一と別れてゐる今の寂しさがひし〳〵と身に泌みて思はずも、口をついて出たのは例の唄だつた。

私やねーえ、ながのりさん、私や太田のなんぢやらホイ、
金山そだち、ヨイ〳〵、

外にやねーえ、ながのりさん、外にやきはない、なんぢやらホイ、まつはかり、ヨイ〳〵、

唄ひながら來た彼の女の眼に不圖白いものが映つた。彼の女の眼は只獲物に饑えてゐた、居た〳〵、と心に叫ぶや、彼の女はそれが何であるか、自分が今何處に居るのかを見定める暇もなく、小銃を持ち直すと一發、ズドーンと放つた。

が、それは何と云ふ不幸であつたらう。

其所は大光院の裏庭で、彼の女の打ち殺したのは、將軍お手放しの白鶴であつた。

「やッ。」

「狼藉者ぢや。」

幕府の役人は銃聲と共に番小屋を驅け出した。

ハッと此時始めて彼の女は自分の爲たことに氣づいた。と共に病母の姿が眼に閃めいた。

「逃げよう。」

彼の女は決心すると、一散に本堂の中に驅け込んだ。本堂では呑龍上人が讀經してゐたが、

「何者ぢや。」

と靜かに振り返つた。

「ハイ、お助け下さいまし、どうぞお助け下さいまし、お願ひで御座います。」

彼の女は上人の袖に縋つて、事情を訴へた。上人は立つて彼の

女を直ぐに隱してしまつた。

「只今此所へ禁制の地に入つて將軍お手放しの白鶴を打ち殺しました女が驅け込み申しまして御座るで、何卒その者をお渡し下さりまするやう願上げまする。」

追つて來た役人は上人の前に手をついて賴んだ。

「知らぬ。」

上人は只簡單に答へて役人の方を振り向かうともしなかつた。

若し隱匿の罪が發覺いたしますれば、お上人樣の御身の上にも係はりまするで、何卒御渡しの程一重に願上げまする。」

「知らぬ。」

大光院は幕吏と雖も入るを得ぬ禁入地である。幕吏は踏み込ん

で捕へることが出來ない。犯人は其所に鼻の先に居ると知りつゝも、何うすることも出來ず、空しく手を引いて去るより外はなかつた。

其日老母も上人の助けで大光院に引き取られたが、難有い上人の慰めを聞いて安心した爲めか、其夜歸らぬ人の數に入つた。

「あゝ、與一、與一。」

一時に來た心の變動に與一の妻は終に心を狂はして、老母の死にも涙も見せず、只戀しい良人の名のみを呼び續けてゐたが、老母の亡軀を抱いて庭の池をまわりながら、悲しい、「私やねーえ」と云ふ唄をうたつた。

そして其夜池に沈んで死んだ。

それから池の蛙は、「與一、與一、」と鳴いた。

上人は池に面した一室に讀經してゐたが、「與一、與一、」と鳴き續ける悲しげの蛙の聲を聞くと、二人の女の身の上を哀れに思ひ。

「もう鳴くな、與一の靈は必ず此池に呼びもどしてやるぞ。」

と池に向つて言つた。

ピタリと蛙の鳴き聲は止んだ。

それから今に至るまで、この池の蛙は決して鳴くことがない。

それからこの池を「鳴かずの池」と言ふのである。

富士姫の命（下野）

此處は下野國の庚申山のふもとである。そこに一軒の豊かな家があつた。

主は幸福だつた。妻はやさしく、其妻との間には三人の娘がある。その娘達は揃ひもそろつて皆世にも稀な程の美しい容色を持つて居た。山の木々も、獣類も娘の美しさに惚れ惚れして心を焦がす程であつた。

それは秋の空高く、青々と晴れ渡つて居る日の事であつた。其家の主は狩りに出かけて、庚申山の奥深く分け入つた。とこ

ろが、どうした事かいつもは一人で持ちきれぬほど獲物がある
のに、此の日に限つて、半日山の中を馳けまはつても一匹の獲
物がなかつたので、主は焦せりに焦せつて木の根岩角を踏み擧
り攀ぢ登ぼつて方々を探しまわつて居る中に、ふと足を踏み滑
べらすと、あつと云ふ間もなく谷の底深く落ち入つた。
幸な事には、身體には少しの怪我も無かつたが、何しろ見上
げると空が小さく見える程の絶壁の底なので、どう工夫して見
ても上がる手段は無かつた。
「オーイ、オーイ、助けてくれー」
と聲を限りに叫んでも、助けに來る人とては一人もなかつた。
助けに來た所でどうする事も出來やう筈はなかつた。

「オーイ、助けてくれー、」
主は咽喉がしびれて、聲の出なくなる迄叫び續けたが、それ
は徒らに絶壁にもの悲しい反響を呼び起すばかりであつた。其
の内に四邊は次第々々に夕暮の暗黑に閉ざされて來て、遠い遠
い空には銀色の豆のやうな星が輝き出した。
「あゝ、もう日が暮れた。」
主は悲しげに云つて、落膽のあまり其處にくづをれてしまつた。
其のまゝ次の日もまた次の日も、主は其處に座つたまゝ日を暮
してしまつた。體は疲れ果て、腹はへり、生きた心地とては少
しもなかつた。思ひ出すのは家の事である。可愛い三人の娘達
はどうして居るだらう。やさしいあの妻は三日も自分が歸らな

いから、どんなに心をいためて居る事であらう。どうかしてもう一度妻に逢ひたい、娘達の顔を見たい、もし妻に逢ふ事が出來、娘達の顔を見る事が出來るならば、其の場で自分の命は絶えてしまつても決して苦しくない。

「あゝ、」

主はさめ〴〵と、枯れ果てた涙を絞つて身の不幸を嘆いた。

其の時不意にどこから現はれ出でたのか、一匹の大猿が主の脇に近寄つて來て、恐れわなゝく主の前にいろ〳〵の果物を並べた。主は疲れた體を匍はせるやうにして其の果物を手にとつたそしていきなりかぢりついた。其のおかげで主は饑を凌ぐ事が出來た。

主は感謝して猿に、人に物を云ふやうに、

「決して此の恩は忘れない、此の上の願ひには、どうとかして私を此谷から上へ擧げてはくれまいか。もし擧げてくれるなら私の三人の娘の中の一人をお前にくれてやるが。」

と述べた。

すると其の大猿は非常に喜んで、やがて附近から無數の同類を集めて來、忽ちの間に藤蔓で長い繩を作り、難なく絶壁の上迄引き渡し、安々と主を谷から救ひ出してくれた。主は去り行く猿の後姿を伏し拜んで限りなき感謝の涙に咽んで居たが、急いで家に歸ると、死んだものと思つて居た主が歸つて來たので、家人の喜びは譬ふるにものなく、妻と娘と左右からとりついて

涙を流して無事を祝した。

「私の助かつたのは猿のおかげなのだ、猿が果物を持つて來てくれたので餓死もしなかつたし、其上藤蔓で谷から引き上げてくれたのだ。其御禮に娘の中の一人を猿にくれる約束をして來たよ。」

と云つたが、其自分の言葉にはつと氣がついて、大變な約束をしてしまつたと初めて氣がついた。大事な娘を獸にくれるなどゝは、いかに自分の命を助かりたいとは云へ、どうしてそんな馬鹿な約束をしたものだつたらう。三人の娘はいづれ劣らず可愛いゝのに、もしも猿が來たならば誰をやらうか、これならやつてもいゝと思ふ娘は居ない。

「ア、私は大變な約束をしてしまつた。」

主は男泣きに泣いた。

妻も驚いて叫んだ。

「あなたはまあ、なぜそんな情ないお約束をなすつたので御座いませう。

今迄の歡喜は忽ち夢と消え失せて、前にも增した悲しみがやつて來た。夫婦は手をとり合つて嘆き悲しんだ。

其時三人の娘の中の中の娘が兩親の前に出て手を仕へ、

「私が參りませう。大事なお父樣やお母樣の爲で御座いますから、私はちつとも悲しくは御座いません。」

兩親は顏を見合せて暫く無言つてゐたが、いきなり娘の前に

手を合せた。
「許してくれ。」
「よく言つてくれた。」
兩親はそれ以外に言葉も出なかつた。
泣く泣く兩親は悲しい娘の嫁入仕度くを急いだ。
其翌くる日こゝの家に一人の立派な若い狩人が訪れた。
「お約束によつてお娘子をいたゞきに參りました。」
母親は娘にとり縋つて嘆き悲しんだ。娘も瀧のやうに涙を流して母親にとりついた。けれどもいつ迄もそうしては居られなかつた。名殘はつきないが娘は行かなければならない。
「どうぞ途中迄おくらせていたゞき度い。」

娘と若い狩人とを送つて落葉の山道を急いだ。日はもう暮れかけて居た。
「さあこゝでお別れしませうこれから先きは人間の入る領分ではありません。私達の領分で御座います。三年の後の今日またこゝで逢ひませう。」
一里近く來てこれから、先きはどうてい人間には踏み込めぬといふ境に立つて若い狩人はこう云つた。
「オ、それではもう別れるか。」
「どうぞ體を大事にしておくれ。」
「それでは三年の後にまたお目にかゝりませう。どうぞお父様もお母様もお體を大事に……」

三人は互に抱き合ひつゝ泣き悲しんで居たが、
「さあ參りませう。」
と云ふが否や、狩人は娘を背負つて飛ぶが如くに岩道を山深く消え失せた。
其翌く日、悲しみのあまり兩親が昨日別れた場所へ再び來て見ると、そこら一面に、娘の嫁入り道具の櫛やかんざしや鏡臺等がとり散らされてあつた。
「あゝ。」
母親は顏を覆ふて泣き崩れた。
「この樣子では娘はもう恐しい獸物に喰ひ殺されてしまつたのであらう。あゝほんとに私は大變な約束をしたものだつた。」

父親はまた自分のした約束を後悔して嘆くのであつた。
嘆きのうちに三年の月日は過ぎてしまつた。
兩親は娘をやつた日に、娘と別れた場所へ尋ねて來た。そこには一通の手紙が置いてあつた。手紙には次のやうな事が記してあつた。
「私はもう人間ではなくなりましたから、嫁入りの時にいたゞいた櫛やかんざしも要りません。あの品のある間は私の命があるのですから、どうか大切にとつて置いて下さい。こゝに大きな石がありませう、此岩を御らん下されば、私の姿が見えます。これは鏡岩といふので御座います。私の事を思ふのほどうぞ今日限りにして下さいまし。

兩親は今更驚きながら、傍らの大岩をのぞくと、娘の姿がぼんやりと寫つた。娘の手足には猿のやうに長い手がいつぱい生えて居た。

「あ、おふぢ。」

と母親が娘の名を呼ぶと同時に、其姿は吹き消す如くに見えなくなつた。

それから三年の後、山の麓の人々は、娘のおふぢの心を哀れんで形見の品を、庚申山の頂きの千丈が岩の中に祭つた。これが富士姫の命である。

絹沼（下野）

のどかな春の日であつた。

林の中に斧の音を響かして、樵夫は丁々と伐木に餘念もなかつたが、勞れを覺えたので、煙草休みをしやうと斧を措いて伐り倒した樹に腰を下すと、不圖、近くから梭の音が心持好く聞えて來た。

「ハテ、此山の中で梭の音が聞える筈はないのだが、不思議のことがあつたものだ。」

と樵夫は獨りで呟きながら、怪しい者の仕業かも知れぬと思つ

たので、斧を提げて立ち上つた。

梭の音は絹沼のほとりから響いて來る。

樵夫はその響のする方へと足音を忍ばせて近寄つた。其所は下野國の日光山脈の北側に沿うて流れる鬼怒川の水源地で、廣い平らな草原の所々に、四十幾つかの沼がある。沼は大小種々あつた。

その中で一番大きい沼は絹沼であつた。その絹沼のほとりから梭の音は聞えて來る。

「不思議のこともあるものだ。」

樵夫は又も呟きながら、そろ〳〵と絹沼の方へ歩み寄つた。

絹沼の岸邊では、其所の神であるところの絹姫が、松の樹に

腰掛けて無心に美しい絹を織つてゐるのであつた。春の柔風は姫の綠の黑髪に戯むれ。流れて沼の上に小さな波を織り出してゐた。姫の腰掛けてゐる松の樹の周圍の地には、色鮮やかな春の草花が、千紫萬紅とり〴〵に咲き亂れてゐた。春の光を横顏にあびて、姫は世にも美しく輝いてゐた。

「まあ、これは何と云ふ美しい姫樣だらう。」

樵夫は一時に魂を天外に飛ばして、恍惚とそのまゝ見惚れてしまつた。

姫は何も氣づかずに靜かに絹を織つてゐる。

樵夫の口からは何度溜息が洩れ出たか知れなかつた。

「ほんとに美しい姫樣だ。」

樵夫はさう言つて足が勞れたので身を動かすと、その拍子にポキリと音がして杖にしてゐた斧が折れた。吃驚して見ると、之はどうしたことか、今朝持つて出たばかりの斧はもう朽ちて腐れてゐた。

「オヤ、これは失敗つた。」

樵夫は四邊を見廻しながら、日も暮れさうなので、姫に心を殘しつゝも、急いで家路に向つた。

「あゝ、今日はほんとに目を悅ばした。あんな美しい女が此世にも居るのだなあ……」

そんな事を考へながら、樵夫が家に歸ると、家の中は恰度樵夫の三年忌で、騷がしく人々が集つてゐて法事を營んでゐるところだつた。

姫の美しさに見惚れてゐた間に、三年の月日が經つてしまつてゐたのであつた。斧が朽ちて折れたのも無理ではなかつた。

絹姫は天に昇つてしまつた。姫の腰掛けた松の樹は今も殘つて生きてゐる。沼の清水も枯れずに青々としてゐる。けれども姫の美しい姿はもう其所に見られない。

けれども毎年春の頃になると、絹沼の岸邊は一帶に美事な春の若草や花に彩どられて、恰度綺麗な絹の織物を敷きつめたやうに見える。

それは絹姫の殘して行つた地上の形身である。

原風（加賀）

加賀國能美郡の山間にある小さな村の西尾では、恰度突然天女でも降りて來たやうな騷ぎが始まつた。

「ホイ、こんな仕事に夢中になつてゐると、佛御前の顏を見る時がなくなる。」

さう云つて仕事をしてゐる男共は、老人も若い者も等しく少し仕事をすると、もう其仕事を投げ出して家を飛び出す。

二人の男が出遇へば屹度佛御前の噂をした。

「お前行つたかの。」

「行かいでか。昨日は朝から晩まで彼所の家で呑み續けぢや。」
「いや俺も昨夜はとう〳〵夜明かしして呑み續けた。」
「特別にうまい酒ぢやもの。」
酒がうまいのではあるまい。女主人の顔が美しいので、酒もうまく呑めるのぢやらう。」
「そんな理屈はどうでもよいわ。平家全盛の時、平家の大將平清盛入道の思ひ者で、寵愛を一身に引きうけて榮華の極みをつくして、あの有名な祇王御前を追ひのけたほどの美人ぢやものこちとらが兎やかくと云ふのは間違ひぢや。」
「そりやさうぢや。時が時ならこちとらは到底も拜まれもせぬ顔ぢや。それが今は酒くんで呉れて、お世辭の一つも云はれる

のぢやもの、全くこんな冥加のことはあるまいよ。」
その噂の主は、人々の言葉の内にもある通り、一時都にあつて此世の榮華を一身に集め、清盛入道の寵愛を受けてときめいた佛御前で、ふと此世の無情を感じては榮華も今更つまらぬものと知り、故郷であるこの加賀國の西尾村に歸つて來たが、お〳〵と遊んでゐては如何に美しい女といへ、その日の生活に困ることも出來てくるので、小さな店を出して酒肴を商つて其日の業としたのである。
何しろ都にあつて朝な夕なに化粧して磨き立てた美しさであるから、村人は皆不意に天女を目のあたり見るやうな心持で、呑めぬ酒まで無理に呑んで佛御前の顔を見るため店に押し寄せ

るので、店は案外な繁昌をした。
男達のさう云ふ風に喜んだのに引き換へて、喜ばぬのは女達であつた。
「うちの亭主の流連するのも全くあの女のためだよ。」
「さうだともさ、うちなんか此月は酒の金ばかりごの位持ち出したか知れやしない。」
「あすこへ幾ら儲けるためにとは云へ、人の亭主を默つて宿めると云ふことがあるものではないよ。わしは是れから行つてウンと云つてやるつもりさ。」
「お前が行くならわしも行かう。そしてあの女を打ちのめしてやる。」

「ぢやわしも行かう。うちの亭主に酒を呑ましたあの白い手を打つくぢいてやる。」
「わしも行かう。」
「わしも行く。」
女房達は嫉妬の焔にかられて只一圖に佛御前を怨んだ。そして大勢でその店へ押し寄せた。
佛御前は恰度姙娠してゐた。女房達はそんな事も構はず、大勢の力で佛を捻ぢ伏せると、蹴る、踏む、叩く、つねる、してさう〳〵佛の息を止めてしまつた。
「それから後、佛御前を殺した祟りであると云ふが、この村の

女が姙娠して、もしも晝の間に産をするやうなことがあると、忽ち天候が變つて俄かに大風が起ると云ふことである。その大風を土地の人は「原風」と呼んで恐れてゐる。そしてもしも晝間産をしなければならないやうな時には、産室に屏風でも立てまはして夜のやうに暗くすることにしてゐる。

蛇ケ淵（信濃）

娘の村は信州木曾の御嶽山の麓にあつた。山の東を川が流れてゐる。西野川と謂ふ。川は諸所に淵をつくつて、淵にはいつでも蒼い水が沈默してゐた。

娘は同じ村の若者を戀ひして、日毎夜毎につのる戀心の重苦しさに耐へ切れなかつた。けれども若者には思ひ合つてゐる女が他にあるので、どうしても娘の哀願を容れやうとしなかつた娘は、自分の戀が無謀だとよく知つてゐた。知つては居たが、男を戀しく思ふ自分の心情はどうすることも出來なかつた。懊

惱は日增しに昂じるばかりである。

或日娘は、今日こそはどうしても男の心を動かさうと決心した、譬令、五月蠅い奴だと罵られても構はない、もう一度この胸の裡に躍り狂つてゐる眞赤な心臟の皷動を、是が非でも男の胸に傳へずにはおかないと決心した、そして男に迫つて行つた。

「厭だ。俺はどうしても厭だ。お前の髪の毛が赤いから厭だ。もしその髪の毛が黑くなつたら、お前を可愛がつてやる。」

男は娘が熱心に口說けば口說くほど冷淡になつて、終ひにかう言つて横を向ひてしまつた。

娘は泣いた。

娘の顏は美しかつた。姿も好かつた。けれども男の言ふ通り

その髪の毛はどうしたのか赤かつた。娘は何よりもそれが悲しかつたが、今またそれを男に言はれたので、身も世もあらぬ程に悲しかつた。拭いても拭いても涙が瀧のやうに流れ落ちた。

「何を泣いてるの。」

さう言つて冷笑を眼元に浮かべながら、泣き伏してゐる娘の傍に立つたのは男の愛し合つてゐる女だつた。

女は男の口から娘の泣いてゐる譯を聞いて、ハ、、、と高い聲で笑ひ出した。笑ひ止まると娘の上に體を屈めながら、

「お前さん、そんなに泣くことはありやしない。彼所の淵へ行つて、一日に三度づゝ髪をつけると、濡烏のやうに黑くなる。」

と敎へた。

娘はそれを聞くと飛び上つて悦んだ。そして女に感謝した。赤い髪があるそればかりに男に嫌はれるのだ。この髪が黒くなれば可愛がつてやると今男は言つた。この赤い髪が黒くなるなら、どんな辛いことでも厭ひはしない。さう思つた娘は、自分とその女とは戀敵同士だなどゝ云ふことに就ては少しも心配しなかつた。

教へられた通りに、娘はそれからの毎日を淵の所で過した。一日に三度づゝ、腰の痛くなることも脚のしびれることも厭はず、淵に身を屈めて水の中に髪の毛を垂らした。

けれども髪の毛は黒くならなかつた。娘は始めて女に欺むかれたのを知つた。

「あゝ口惜しい、口惜しい。だまされた。この恨みはどうしてやらう。二人を取り殺してやらう。さうだ、二人を取り殺してやる。

今迄の美しかつた顔は忽ち恐ろしい行相に變つて、娘は狂氣のやうになつて叫んだが、ぷつッと丈なすその髪を根元から剃刀で切ると、水面を目がけて投げ込んだ。さら〳〵と髪は鳴つて水の上に落ちたが、くる〳〵と渦巻いて水底深く沈んで行つた。

しばらくすると水面はざわ〳〵と波立ちやがて、幾千匹とも數知れぬ小蛇が波間に浮かび上り、娘を守つて向ふ岸に渡つた。そして岸の崖にある一つの大きな洞穴に娘を連れ込んだ。

間もなく其夜村から、娘に思はれた男と娘を欺むいた女とは

行衛が解らなくなつた。村人は大騒ぎをして二人の跡を尋ねたすると洞穴の前に男女の草履片々づゝがあつたので、二人がその洞穴に引き込まれたのだらうと知れた。洞穴のある淵には無數の小蛇が戯れてゐた。

この事があつてから後、村人はこの淵を蛇が淵と呼ぶやうになつた、その後も、時折この淵で美しい少女や若い男の姿が見えなくなる。今でも村人は恐れてこの淵に近寄らない。

永い戀（信濃）

島々村の豪家の一人娘は、十七の春になると、急にそはそはしだして、裁縫も何も手につかなくなつた。親達は心配して色々とそのわけを問ひ正してみたが、娘は俯向けた顔を赤くするばかりで、何の返答もしなかつた。

島々村と云ふのは、信濃國の安曇郡にあつた。

その内に誰云ふとなく、あの豪家の娘は梓川の向うの豪家の美しい作男を見そめたのだと云ふ噂が、パッと村中へひろがつた。親達は今更驚ろいて、また娘を呼んで問ひ正したが、娘は

只顔を一層赤くするばかりで、やつぱり返答はしなかつた。

娘はどうして初戀の胸の中を、たとへ兩親の前だからと云つて語られやう。それは尋ねる方が無理だつた。

けれども娘の戀は悲しかつた。何故と云つて、梓川は娘の家のある村と、娘の戀ひしてゐる豪家の作男の居る村との間を流れてゐるので、その川には橋と云ふものがなかつた。娘は朝な夕なに川岸に佇んでは、川向ふを眺めて居た。作男もそれと知ると、向ふ岸に出ては娘の美しい姿に見惚れた。作男もいつか娘のことを思つてゐたのである。

娘は今はもう人目の關所などは考へてゐなかつた。只、二人の間を隔てゝゐる急な流れが憎くて耐らなかつた、川を隔てゝ

言葉を交はさずに、只眺めてゐるのは何としても我慢がし切れなかつた。

娘は不圖橋のことを思つた。もし橋さへあれば戀ひしい男の傍に行けるのだと考へた。その考へは娘を強くした。娘は自分の力でこの川に橋を架けやうと決心した。

今までしたこともなかつた仕事を、娘はセッセと毎晩遲くまで勵んだ。そして其細工物を町へ持つて行つては賣つた。その金で歸りには頑丈な厚い板を買つて來た。さうした狂氣染みた眞似をするのを見ても、今は兩親も止めなかつた。娘の心は男戀ひしさに燃え狂つてゐるのだから、何と云つて止めたところで無駄だと知つたのである。

娘は纖細い腕に板を抱へて川岸へ出ると、その板を段々岸から急流の上に突き出して行つた。丸太の入用を感ずれば、細工物を賣つて丸太を買つた。

向ふ岸からさうした娘の努力を眺めた作男は、娘を見習つてまた向ふ岸から板を突き出して來た。この二人の熱心を見た村人は、若い二人の戀に同情した。そして暇のある時は屹度手傳つて呉れた。板を惠む者もあつた。丸太を呉れる者もあつた。

段々兩方からの板は迫つて行つた。けれども三晩四晩或は十日の仕事の後に出來た細工物を賣つても、その金は一枚の板を買ふに足りるほどの額には容易に上らない。其板は餘程丈夫な厚いものでなければならないので、それだけ値段も高かつた。

それ故、兩方からの板橋は直きに屆きさうに見えてゐて、なかなか屆かなかつた。

そして、この橋がピタリと兩方から相合ふまでには十幾年の年が經つた。十七だつた娘は二十幾つになつた。

「かうしたかつた。」

「かうやりたかつた。」

と二人は兩方から橋を驅け寄つて、橋の眞中で確り抱き合つた兩方の村人も二人と一緒になつて悅んだ。

この橋は雜志橋と呼ばれてゐる。今でもこの橋はある。白骨の溫泉へ行く途にあるから、溫泉にでも行く折があつたらば、

行つて見るがよからう。

人魚塚（越後）

荒海の中に立た孤島、佐渡の濱邊に立つて女は凝と越後の國を眺めてゐた。

夕星は美しく雲間に燦めいて、海から山を輝やかし、立つ女の影を照らした。晝の間の風は止み、岸邊には山のやうな土用浪が無言に寄せては返して行く。夕の光りを羽根にうけて翅ぶ虫、砂濱の岩蔭にすだく虫、四邊は只靜かに、刻一刻と夜の手に包まれて行くのを待つてゐる。

女も早く夜になるのを待ち焦れてゐた。

「おうい。」

女はやがて思ひに耐へ切れぬらしく、兩手を擧げて浪の上遙かに聲を振りしぼつた。そして男の名を呼んだ。

男は越後に住んでゐた。戀に燃えてゐる女の聲でも、佐渡から越後までは四十五里も離れてゐると云ふ浪の上を、どうして男の耳まで達してやう。けれども女の胸は叫ばずには居られない程戀しさに狂つてゐたのである。

「あゝ早く磯明神樣の常夜燈に赤い灯がつけばいゝに。」

と女は思つて、それを一刻千秋の思ひで待つた。

越後の瀉町にある磯明神樣の常夜燈の下に、男の家はある。赤い灯がつけば、そこらだと見當もつくのである。灯がつかない

内は、只廣い海の上は茫として男の家は何の方向にあるのかさへ知れない。

女は瞬きもしないで、眤と海の遠くを眺めてゐたが、やがて狂氣した人のやうに、

「ア、點いた、點いた。赤い灯がついた。磯明神樣の常夜燈が點いた。」

と手を打つて叫んだ。

「さあ行かう。あの灯を見當てにまた泳いで行かう。妾が行つたらまたどんなに悅んで呉れるだらう。」

女は男戀ひしさに、何も彼も忘れて、ザンブと荒海の浪の中に身を躍らして飛び込んだ。そして泳ぎ出した。

曉近く女は越後の岸へ泳ぎ着いた。濡れた體は、月光に人魚のやうに白く輝いた。

戸を叩かれた男は、密と女を自分の部屋に引き入れた。

二人は短い逢ふ瀬を烈しい抱擁に歡んだ。けれどもそれは全く短い束の間である。やがて星が空に消えやうとする頃には、女は再び海を泳ぎ渡つて、佐渡の自分の家に歸つてゐなければならなかつた。

毎晩女はかうして四十五里の海を泳いで、男の所まで逢ひに來たり男は段々女のさうした執念を恐ろしく感じ出した。それと共に、自分の土地に新らしい戀女が出來た。

「どうしても耐らない。まるで人魚のやうに濡れて光る體を見ると、俺はゾッとする。あゝ厭だ厭だ。永い間の浪を泳ぎ切つて來るのだから、體は雪の中の石のやうに冷たくなつてゐる。それを俺は一生懸命に毎晩温めてやらなけりやならない。まるで死人を抱くやうな氣がする。……それに引き換へて此地の女は天女のやうに美しいわ。色は白いし、肌はなめらかだし、言葉はやわらかいし、ほんとに天人のやうだ。」

と男は思つては、身震ひしたり笑つたりしてゐたが、その内に段々佐渡の女を嫌ふ心は烈しくなり、凝と考へてはゐられなくなつた。

或晩男は新らしい戀女と話し合つてゐた。

「俺はあの女を殺してしまひ度いと思ふ。」
「けれど殺すのは可哀相ですよ。それほどあなたに惚れてゐるものを。」
「俺は恐ろしいのだ。今にこのまゝで居れば、屹度俺はあの女に、體中の熱を吸ひ取られて、殺されてしまふ。」
「もう幾晩來るの。」
「幾晩來るか、俺には數へ切れぬほどになる。」
「よくそんな長い所を泳いで來られるわね。」
「夢中なんだ。」
「女の一心ほど強いものはないわね。」
「それが俺には恐ろしいんだ。髪の毛からも、乳からも、だら

〳〵鹽水がたれて、それが月の光りに蒼白くピカ〳〵光つてゐるのは、まるで人魚のやうだ。擦つても抱きしめても、なかなか冷えた體は溫まりやしない。いつの間にか俺の體も石のやうに冷たくなつてしまふ。あゝ考へると耐らない。俺は今夜どうしても殺してやる。」
「どうして殺すの。」
「毎晩あの磯明神樣の常夜燈を見當てに來るのだから、あの灯を消してしまへば、海の途中で方角が解らなくなつて、浪に沈められてしまうだらう。」
「まあ可愛相ぢやないの。」
「けれど、俺も可哀相だ。」

女はその夜も常夜燈の赤い灯を目標に、海の中途まで泳いで來ると、フッと唯一の生命の綱のその光りが消えた。

「アッ。」

と思はず叫んで手を揚げたが、一秒、二秒、三秒……時間が經つても灯は再び見えなかつた。急に力を拔かれた女の體は荒浪のまに〳〵木の葉のやうに弄ばれた、星さへ見えぬ相憎くの荒れ模樣の空は、只闇く廣く、叫ぶ女の聲を怒る人の如く呑み込んでしまつた。

「あゝ。あゝ。」

と女は浪の間に聲を揚げた。

黑い浪は後から後からと押し寄せて、終ひに女の身を呑み込

んだ。

次の朝、腹一面に人魚のやうな美しい銀色の鱗をつけた女の死體が、越後の岸の、磯明神の濱邊に打ち上げられてゐた。朝日がその銀色の鱗にキラ〳〵光つた。

濱の人は女の死を哀れんで、其所に塚を造つて女を埋めてやつた。そして人魚塚と命名した。

杢太ケ池（越後）

越後の國の高田から東の方へ二里ばかり離れて、うねうねと波のやうに連らなる山脈がある。その山脈の内の一つの山に大名の城塞があつた。その山は箕冠山と云つた。

二人の百姓は城塞を仰ぎながら、その城塞の主の噂をして行つた。

「それはまあ眞實のことか。」

「決して嘘ではない。獨眼でこそあれ、あのやうに美男のお殿様ぢや、その位のことはあるのが當然だ。」

「だと云つて餘りと云へば不思議ではないか。」
「何も不思議のことはない。是ればかりは他からは考へても解らぬ別事だ。」
「それはさうに違いない。けれどもよく民を治めて、遠近の民が皆その德になついてゐる位尊いお方だに、そんな魔のやうなものがつく道理はない。」
「道理がなくとも、現にお城の忠義な方々はそれで心配してゐるのだから、それが何よりの證據ではないか。」
「だと云つて、あの嚴重な大名屋敷に、如何に夜にまぎれてとは云へ、妙齡の美女の身で、どうして忍び込めやう。とても信ぜられぬ事だ。」

「信ぜられぬ事だが、毎夜必ず警護の武士の眼をかすめて、何處からともなく其美しい女は風のやうにお屋敷に忍び込んで、殿様のお室でむつまじく殿様と語られてゐるさうだ。」
「不思議な事だ。」
「全くだ。」
二人の百姓は城を仰いで行き過ぎた。
箕冠山の上にある城の主は杢太と云ふ名であつた。恐ろしい程の美男で、民をいたわり、德もあつく、百姓からも臣下からもなつかれてゐた。只獨眼であつたのを誰も氣の毒に思つてゐた。
その殿様のもとへ、近頃夜になると、百姓の噂さの通り、何

處からとも知れず一人の美女が忍んで來た。それはもう數ケ月も續いた。

忠義の武士達は殿の身の上を案じた。如何に嚴重に警戒しても、警戒の武士の眼にその美人の姿の見えぬのは、どうしても魔性の者でなければならぬ。そんな者を殿のところに毎夜通はせるのは危險である。何とかしなければならぬ。さう誰も彼も考へたのであつた。

度々或人々は殿に、その女を遠ざけるやうに諫めた。けれども殿は臣下の言葉をきかなかつた。殿の心はいよ〳〵深く女の方に傾むいて行つた。

「困つた事だ。」

「危險なことだ。」

と臣下は何れも心を痛めた。

間もなく臣下の者の恐れてゐた日が來た。

或夜殿は闇にまぎれて、只一人具足に身を固め、箕冠の城を抜け出した。そして再び城に歸つて來たのは殿の愛馬だけであつた。

「殿は何處へ行かれたのだらう。」

「鞍を乘せてゐる以上は、この馬に乘つて出られたことは確かぢや。」

「兎も角かうしては居られぬ。八方に手分けをして探し人を出さねばならぬ。」

「さうぢや、早く、早く。」
武士達は皆城を出て探しに向つた。それと聞いて驅けつけた百姓も皆武士達に手傳つて、山へ分け入つた。けれども殿の行衛は分らなかつた。
人々はもう尋ねあぐんでゐた。
すると或日、城下の者で城から餘り遠くない、同じ山脈の内の一つの山の青柳山に、芝を刈に行つた者があつたが、その者が息せき切つて城へ驅け込むと、
「あの青柳の池の端に、お殿樣のだと思はれる鎧と兜とが捨てゝ御座ります。」と注申した。
それと人々は其所へ驅けつけて見た。

果して其所には、殿の鎧と兜とが石の上におかれてあつた。
殿の遺書もあつた。
「殿樣はこの池に入られたのだ。」
「あの毎夜通つて來た美女はこの池の主であつたのだらう。」
「もう手の下しやうはない。」
人々は只茫然として佇むより外には術もなかつた。
其時殿の鎧と兜とがおかれてあつた石は今もある。「鎧石」と呼ばれてゐる。また池は杢太の池と普通呼んでゐるが、不思議のことには、それ以來、この池の魚はみんな片眼しかない。

片葉の蘆（越後）

或年の秋の夕ぐれ、越後の直江津から一里ばかり西の方に寄つた五智國分の里に、一人の美しい若い旅の僧がたどりついた。陽は眞赤な日本海の彼方に沈まうとして、地上に僧の影が長く黑く印された。

「旅の勞れに咽喉が渴いて困却いたすが、一杯の水を御無心致し度い。」

僧は人の家を見る毎に、その軒下に立つてかう言つた。

「どうも御氣の毒樣だが水はありませんよ。」

何處の家でもさう云つて斷る。
「水、へ、、、何處ぞそこらで探して呑んでお呉んなされ。」と天で取り合はぬ家の人もあつた。
僧は不思議に思つた。そこで或家の者に、何故水を呉れぬのかと問ひ正してみた。すると、
「そりや御出家樣のお賴みぢやもの、わたしらは何とかして水を上げたいとは思ひますが、この邊には井戸と云ふものがなくみんな半里も離れた山の裾野からヱッチラオッチラ運んで來るのだから、どうして茶碗一杯の水も他人にはやられませぬのぢや。」と其者が答へた。
「何故また井戸がないのであらう。」

「何故と云つて、何處を堀つても水が出ないのぢや。」
旅僧は心の裡に、さて〳〵不幸な土地ぢやと思つた。そして暫時默つてゐたが、やがて何か獨りうなづくと、其所の家を出てそこらを歩きまはつてゐたが、或所に立ちどまると、瞼を閉ぢて立つたまゝ讀經を始めた。
高い美しい聲は秋の夕空に反響して、清くも尊くも聞えた。
夕日は刻々に西に沈んで、僧の姿をいろ〳〵の色に變化さした。
その内に眞赤な太陽は全く西の波に沈んだ。と、旅僧の讀經もはたと止んだ。
すると、間もなく、今迄は青く廣く澄み渡つてゐた大空は俄かに搔き曇つて黑雲を吹き廣げ、鎗のやうな烈しい雨が大地を

打つて降り出した。

僧はその豪雨の中に凝と立ちつくしてゐた。

いつのまにか旅僧の前には、漫々たる清水をたゝえた池が出來てゐた。微笑した僧は、身を屈めてその水を掬つてのんだ。恰度その時雨は遠く海に去つてゐた。

里人はその池のお蔭で水に困らなくなつた。その僧は弘法大師であつた。

弘法大師はその池の端に小さな庵室を造ると、そこに籠つて自分の姿を池に映し、それを見ては我と我像を刻み出した。朝は夜の明けかけるとから、夜は月光の山の端に沈むまで、鑿の響きが庵室から聞えた。

「何と云ふ美しい方ぢやらう。」

「若いが偉いお坊さまだ。」

「ひそかに思をこがしてゐる若い娘達があるが、無理ならぬほどの美男ぢやな。」

「僧にしておくのは惜しい。」

里人はよくこんな話をひそ〳〵した。

大師は只一念自分の像を刻み急いだ。

或日大師は不圖美妙な音の耳に入るのを感じて、鑿を動かす手を止め、池の彼方を眺めると、世にも稀れな一人の美しい乙女が、じつと僧の方を眺めながら唇に蘆の葉を當てゝ吹き、僧の顔を見てにつこり笑つた。

大師はハッとしたが、心を澄して經文を口に稱へると、又俯向いて鑿の手を熱心に動かし始めた。そして夜になつても再び乙女の方には眸を向けなかつた。

魔の乙女はそれから毎日、池の岸に立つては美妙に、蘆の葉の笛を吹いて若い僧の心を自分に振り向けやうとつとめた。

けれども大師は振り向かなかつた。そして永い月日の後に漸く像は刻み上つた。

その翌朝僧は何處ともなく飄然と立ち去つてしまつた。後に殘つたのは、刻まれたその像のみであつた。

池の岸邊の蘆は、僧を誘惑しやうとして魔女が、葉の笛を作るために、手の届く限りは片方の葉をむしり取つてしまつたの

で、其後になつても片葉しか生長しなくなつた。それを片葉の蘆と呼んでゐる。その蘆は今もある。又弘法大師の庵室もそのまゝ今に至るまで殘つてゐて、善男善女が引きも切らず參詣してゐる。

姫名草（佐渡）

或年の夏、月の光りに海の水が青くキラ〳〵と輝く夜であつた。佐渡の北の海岸、鹿の浦の濱に何處からとも知れず一隻の屋形船が流れ着いた。

雨風に永く吹き曝されたらしく、屋形船は荒れてゐたが、餘程遠い國の都の船と覺しく、その華美の裝りは濱邊の人々の目を驚ろかした。

船からは一人の美しい姫がまろび出て、濱の小石の上に泣き伏した。

濱の人々は姫をいたはつて色々と親切につくした。そして姫の身の上を尋ねた。

「あゝ、都が戀しい。都が戀しい。」

と云つて姫は只泣きむせんだ。

段々濱の人が尋ねると、姫は都のさる上臈であつたが、不圖した不義の戀から、この島に流されたのださうである。

濱の人々は姫の身の上を哀れに思つた。殊に男達は美しい姫を氣の毒に思つて、夜となく日となく姫をいたはり、其上中の川と云ふ濱邊に流れる川の川上に、一つの小さな庵を造つて姫を其所に入れ、やはり毎日毎夜通つて行つた。

それを見て不安の思ひを起したのは、濱の女達であつた。

あの姫が來てから、男はみんな姫にばかり心を奪はれて、少しもわたし達のことを思つて呉れない。今にあの姫のために男達はみんなわたし達を棄てゝしまふかも知れない。」

女は皆さう考へた。

その考へは次第に強くなつて行つた。

女達は姫の美しさに奪はれた男達を再び自分達の胸に引きもどさなければ居られなくなつた。

女達はひそかに姫の處に行き、そして姫をさいなんだ。

姫は都戀しさにやつれてゐた上に、毎日毎夜の男共のうるさいおとづれに勞れ果てゝゐる處へ、女達からさいなまれたのだから、忽ち身も心も弱りつくし、終ひに耐へ兼ねて中の川に身

を投げて死んだ。

濱の男は再び女達の胸に返つて來た。

けれどもそれから中の川には日に三度づゝ毒が流れるやうになつた。それは川に沈んだ姫の血である。

川のほとり一面に生え出した可憐な草は、姫の涙から生れた草花で、姫名草と人々は呼んでゐる。

この邊の海岸には其後、永久に美しい女は生れなくなつた。生れる女はみんな醜い顔をしてゐる。

乙女塚（攝津）

蘆屋乙女は美しかつた。攝津の國の蘆屋の里で、この乙女を知らぬ者はなかつた。男は勿論のこと、女でも話のついでには屹度この蘆屋乙女の美しいことを語り合ふのだつた。

我こそ彼の女の婿にならう、我こそ彼の女を妻にしやうと競ふ男は、秋の夜の星の數の如く多くゐた。その中でも、菟原男と信太男とは、何れ劣らぬ熱烈さで、彼の女に戀してゐた。菟原男は乙女の家に近くに住んでゐたが、信太男は遠く離れて住んでゐた。けれども二人の男の心の、乙女を慕ふ情は其住む地

の遠いと近いとに依つて變りはなかつた。

或日、この二人は偶然にも、乙女の門前を徘徊してゐる時にばつたり出會つた。

「俺の方がお前より先きに乙女を戀ひしてゐるのだ。お前は引込んでゐたが可い。」と信太男は肩を聳かした。すると菟原男も負けてはゐなかつた。

「否、俺の方こそお前よりもずつと先きに思ひを懸けてゐたのだ。お前こそ引込んでゐるがいゝ。」

「引込んでなど居られるものか。」

「俺も引込んでは居られない。」

「劒にかけてもか。」

「おう、劒にかけても。」

二人は相迫つて、眼を瞋らし、腰の劒に手をかけた。

門の内から此爭ひを見てゐた乙女の父は、驅け出して二人の間に割つて入つた。

「まあ待ちなされ二人共、一人の娘を二人で爭ふとも詮ないことぢや。あの生田川の岸に臺を築く故、お前等は其所で流水の上の鴨を射るがよい。射當てた者に娘をやるとしやう。」

「それは面白い。」

「其時まで俺の腕の强さを見せるのは待たう。」

二人の若い男は腕を叩いて別れた。

乙女の父親は早速生田川の岸邊に一つの臺を造つた。そして

乙女と二人して男等の來るのを待つた。

二人の男は弓を提げてやつて來た。

川の流れには一羽の鴨が悠々と泳いでゐた。

「では一緒にあの鴨を射て見るがいゝ。」と父親が言つた。

その言葉と共に、二人はキリ〳〵と弓を引き絞つた。そして同時に、發矢と放つた。一矢は鴨の首に、一矢はその尾に射當てた。

「俺の矢が當つた。」と菟原男は叫んだ。

「いや、俺の矢も當つた。」と信太男も言つた。そして二人は又しても此所に烈しい爭ひを始めた。

蘆屋乙女はこの爭ひを淺ましいことに思つた。元より乙女は

二人の男の内の、何れを深く思つてゐると云ふこともなく、只父の命ずる男と添はふと考へてゐたのである。けれども何れの男と父にも指定することが出來なかつた。

乙女は自分の美しさが怨めしかつた。自分一人の爲めに大の男が二人、生命を投げ出して爭ふのを見てゐることが苦しかつた。

「俺の矢が先きに當つたのだ。」

「否、俺の矢が先きだ。」

二人の男はまだ爭つてゐた。乙女はそれを見ると、

住みわびぬ我身投げてむ津の國の
生田の川の名こそありけれ

と一首の和歌を詠んで、アッと云ふ間に身を躍らせて生田川の底に沈んでしまつた。その時乙女を助けやうと、二人の男は同時に水中へ躍り入つたが、信太男は乙女の足に取りついたまゝ、菟原男は乙女の手に取りついたまゝ、何れも乙女と共に溺れ死んだ。

父親は今更哭き悲しんだが、もう如何することも出來なかつたので、其所に三人の死骸を埋めた。そして一つの塚をつくつた。

塚は今もある。旅人が昔語りをしながら、時々此塚に花を上げて行く。

箸墓（大和）

「今夜こそ訊いて見ねばならぬ。」

その夜姫は獨り胸の裡で、かう堅く決心した。そして男の來るのを待つてゐた。

倭迹々日百襲姫は偉いお方ぢや、武埴安彦の謀反を看破されたゝ、まつたく御聰明ぢや、と時の人は何れも姫の智慧深いのに感嘆してゐた。その姫も戀に落ちては凡人と異るところはなかつた。

不圖した垣間見から馴れそめた男は、毎夜通つて來るが、只

御諸山に住む者とばかりで、何處の某とも、何をしてゐる男とも姫は知らなかつたのである。それを知らうとしても、戀故に姫の聰明も曇らされて、終に知る由もなかつた。そこで姫は今夜男にそれを尋ねて見やうと思つたのである。

男はやつて來た。

「御身はいつも夜のみ來給ひ、晝は見え給はぬ故、いまだお姿を見奉らぬは口惜しく覺え侍る。切めて一度は、お姿を見せ給へ。」

と姫は男の膝に縋つて口説いた。男はいつも夜ばかり來て、曉方に歸つて行くので、姫には美しい男なのか醜い男なのかさえ知り得なかつたのである。

「御身の賴みは尤もなり。さらば明朝御身の櫛笥の中に我れ居らん。密かに開きて見給へ。」と男は答へた。

姫はその翌朝、男の言つたまゝに、自分の櫛笥を密と開けて見たが、中には美しい小蛇が一匹居て、蓋を開けると共に、その首をもたげて姫の方に向つたので、

「アレッ。」と思はず姫が聲を揚げると、蛇は忽ち美しい男の姿となり、ハッタと姫を睨まひ、

「姫よ。お身の賴みなるに依つて我が姿を見せたるに、御身は聲を揚げて我れを辱かしめたり。この恨みは必ず報いん。」

と云ふや、虛空に舞ひ上つて消え失せた。

「あゝ、それでは毎夜通つて來たのは蛇でありしか。あまりと

云へば淺ましき限りにありき、人にもあらぬ蛇と契るとはと。」

姫は今更嘆き悲しんだが、どうともすることは出來なかつたそして恥ぢて箸を執ると、それで咽喉を突いて敢えなく自害して果てた。

姫の亡き骸を葬むつた所を箸塚と呼んでゐる。大和巡りのついでにでも廻つて、哀れなこの姫の靈魂を慰めるのも、人の情として無駄のことではあるまい。

女郎花塚（大和）

「あなたはまだ知らずに居るのですか。まあ御可哀相に。あの賴風樣はツイこの頃新らしい奥樣をお迎へになりましたよ。」

知り人はさう言つて、哀れむやうに女の顔を見た。女の面は俄かに蒼く曇つた。

「よもや彼の人に限つて……」

ども思ひ直して見た。けれども知り人の言葉は嘘でもないらしかつた。

「さう云はれゝば、この頃賴風樣の少しも來られぬのもをかし

い。」

疑へば疑ふことは幾らもあつた。

女は賴風の家に訪ねて見るのが一番の早道だと、漸く考へついたそして知り人と別れた。

小野賴風は京の片田舍、男山の麓に住んでゐた。女は京の街に居て、日頃から賴風の情けを受けてゐた。その賴風は近頃になつて滅多に女の所へ來なくなつた。女は、男が多忙なために來られないのだらうと考へてゐた。

今日女は八幡まで買ひ物に來て、知人に逢ふと、圖らずも男の噂さが出て、思ひも掛けぬこの話を聞いたのである。

女はまだ半信半疑で賴風の家まで訪ねて來た。

けれども賴風は女の姿を見ると、急に逃げて隱れてしまつた。

もう女から心が去つてゐたのである。

「あゝ、やつぱり本當だつたのか。」

女は悲嘆にくれて、やゝ暫時は其所に泣き伏してゐたが、やがて立ち上ると、しほ〳〵として歸り路に向つた。

「あゝ口惜しい。」

考へれば考へる程女は賴風の心變が口惜しかつた。

「死んでやる。死んでやる。」

思はず女はこんな事を口走つた。

放生川のほとりに來て立ち停つた女は、見るともなく川の面を見下したが、水の底が急に云ひ知れず戀ひしくなつた。其所

は非常に樂しい所のやうに思はれた。そして誰か頻りに手招ぎしてゐるやうに思はれた。

女はふら〳〵と衣を脱ぎ、ざんぶと川に飛び込んだ。

その秋、女が衣を脱ぎすてた所に一莖の草が生えた。それは女の衣の山吹襲ねと同じ色の花だつた。賴風はその噂を耳にすると、女が哀れになつて、やがて己も其所から身を投げて命を棄てた。今も毎年女郎花は古丘に咲く。

吉祥姫（出雲）

光仁天皇は或夜の夢に、出雲の大社の神がゆめ枕に立たせられて、

「この繪像とこの履とをしるしとして、國々に御幸して御さがしなされば、世にまれなる美しき乙女を得させられるであらう」

と告げ給ふと見て、夢から覺められた。

天皇は日頃から、「朕は世にも雙びなきほどの美しい后を得たい。」と仰せられてゐた。

御夢が覺めて枕元を見させられると、其所には美しい乙女の

繪像と履とがあつた。天皇は非常に御喜びになられて、早速國々を御巡幸あらせられることになつた。

繪像は御輿の内に掛けられ、其下に履も据えられ、侍臣は新らしい國里に入る毎に、御輿の先に立つて高らかに呼ばはつた。

「七難を遁れ、八苦を祓ひ、富貴の身となり、世の事意のまゝになる身とならんと望む者は、とく〳〵來つて御輿の内の繪像を拜みまつれ。」

國々の女達はその聲を聞くと我れ先きにと、御輿の前にひれ伏して繪像を拜した。侍臣は其中から繪像に似た女を探し求めた。けれどもその美しい乙女はなか〳〵に見出だされなかつた。

その内に二年近くの月日が經ち、御輿は出雲の國に入られた

侍臣は神門の原を行く時、遠く大社の森を眺めながら、早苗植ゑる乙女の群に向つて又呼ばはつた。すると、

……白玉のしづくや。好き玉しづく。おしとゞ、としとゞ。しかせば國ぞ榮ゆるや、わざへらぞ、榮ゆるや、おしとゞ、としとゞ。……と歌つてゐた乙女等は侍臣の聲を聞くと我れも我れもと田の中から驅け上つて、路端に繪像を拜した。その中に唯一人、田の中に殘つて御輿の方を見向きもせぬ乙女があつた。

「いかにそれなる乙女、何故尊き繪像は拜まぬぞ、富貴もいらぬか、榮華も願はぬか。」

と侍臣は聲をかけた。

「尊いものは拜みたう御座ります。富貴も得たく、榮華とやらも願はしくは御座ります。なれども人に雇はれて使はるゝ身は働かねばなりませぬ。」

と乙女は美しい聲で答へた。

「うら若い身の、なぜそのやうな賢しい事はいふぞ。」

乙女の黑い眸の內には涙らしいものが光つた。

「わたくしは上朝山の里に生れた者に御座りまするが、三歲の時に父は遠くの國へ行きました。それから母の手に育てられて、今年十六になりましたところ、母は病の床に打ち伏す身となりましたので、わたくしは一生懸命に稼いで、親子の命をつないでおりまする。

それを聞いた侍臣は哀れなことに思ひ、やがて乙女を御輿の近く連れて來た。

乙女の顏から姿から、繪像の乙女が拔け出したかと思はれるやうであつた。侍臣は早速乙女の足を洗つて、履をはかせて見ると、履はぴたりと乙女の足にはまつた。

「おゝ、この乙女こそ夢のお告げの乙女である。」

と侍臣達は叫んで悅んだ。

天皇も大いに喜ばれた。

乙女は母に相談した。

母は言つた。

「大君のお言葉にもどつてはならぬ。お前の譽れは出雲の國全

體の譽れぢや、行くがよい。殊には大社の神の御ひき合せぢや
と云ふに、行かねばならぬ。」
乙女は間もなく畏きあたりに仕へて吉祥姫と呼ばれた。

推恵神社（出雲）

恵尊は美しい妻を迎へて、幸福な日を送つてゐた。
恵尊は出雲の大社のある地から、三里ばかり隔たつた日御碕村の日御碕神社の宮司であつた。その先祖は天菩根命であつた今度迎へた妻の父は、出雲の國主松平出羽守の家老で神谷源五郎と云ふ人であつた。
恵尊は正直で温順で、村人からは生神様だと云はれてゐた。そして美しい妻と二人、永久に續くやうな幸福な日を、清淨な境内に送つてゐた。

其所へ或日國主の出羽守が、大社に參詣したついでに日御碕神社にも參詣すると云つて立ち寄つたが、忽ち惠尊の美しい妻に思ひをかけて、自分の者としやうと云ふ惡い心を起した。

惠尊はそんな事は少しも知らずにゐた。

すると數日の後に、出羽守は惠尊を呼んで祈禱をさせたが、その祈禱に難をつけ、惠尊を罪に落して遠く隱岐の島へ流してしまつた。

惠尊は始めて出羽守の惡心を知り、自分達の平和を破られて、怒りに怒つた、けれども國主の命は何うすることも出來なかつた。泣く泣く妻と別れて、波路遠く隱岐の島に送られた。

出羽守は早速家老の神谷源五郎を呼び寄せると、娘を侍女と

して奉れと嚴命を傳へた。源五郎は止むなく、娘を惠尊の家から自分の家に引き取つた。そして何うしたものかと深く考へ沈んだ。

娘は惠尊に別れた悲哀に身も世もあらぬ如く、毎日泣き悲んだ。源五郎はそのいぢらしさを見てゐられなかつた。

出羽守は烈しく源五郎に催促した。

源五郎は遂に決心した。娘も父と同じ決心をした。

翌日源五郎は國主の前に出た。

「仰せに因つて娘を連れまして御座ります。何卒幾久しく御目をかけられて下さりませ。」と申せば、出羽守は喜び、

「おゝ、早速の承諾大儀であつた。早く此所に連れ參れ。」

「ハイ。お次に居りまするで、只今連れ參りまする。」

次の間から源五郎の連れて來たのは、娘の首であつた。

娘の首は細く目を開けて、美しくも物凄く、出羽守を睨んで胸の怨みを告げてゐた。ハッとして出羽守は色青ざめ、無言に立つて奥へ逃げ込んだ。

源五郎は主君の言葉にそむかず、そして主君の我儘の再び出で來ぬ工夫をしたのであつた。

隱岐の島でこの事を聞いた惠尊は非常に怒つた。そして幣束を取つて濱邊に驅け出すと、松江の方に向つて三日三晩烈しい詛ひをした。恐ろしい形相をしたまゝ、惠尊は三日目の夜濱邊で立往生をした。

或日出羽守の寢殿の庭先に、何か白いものが落ちてゐた。侍臣に命じて取り上げさせると、それは隱岐の濱邊で呪ひを上げた時の惠尊の持つてゐた幣束であつた。

「あゝ惡いことをした。」

出羽守は始めて良心の呵責に苦しめられた。そして床についた。

或日には又、出羽守の枕元で、二匹の白い蛇が飛び狂ひ、跳ね躍つてゐた。それを見てから出羽守は遂々氣が狂つてしまつた。そして狂ひに狂つた揚句、我が手に我身を斬りさいなんで死んだ。

松平家では其後社を建てゝ惠尊夫婦の靈を祭つた。それが推惠神社である。

種ケ池（因幡）

因幡國宮下村の長者は、或年のこと、自分の家から遠くもない海岸の細川村から一人の下女を雇ひ入れて來た。この邊の田舍には珍らしい縹緻好しの上に、その下女はよく働き、その上にお世辭が非常に好かつた。

長者の家には多くの下女下男が居た。それらの者もこの下女に就てはみんな賞めてゐた。下女の名はお種さんと云つた。

「俺は休みの時が來るのが何よりも嬉しくなつた。あのお種さんと一緒にお茶を呑んで、面白い話が出來るからな。」

と一人の下男が言へば、一人はまた、
「お種さんの笑つた顔は何とも云へぬ美しいものだ。俺はすつかり氣に入つた。」と云ふ。そんな風で誰の者と定つたわけではなかつたが、お種は多くの下男の共同戀人のやうに、みんなから可愛がられた。
或日茶休みの時であつた。
「何かうまい物が食ひたいな。」と一人が言へば、
「さうだな、何かうまいものがあるといゝな。」と他の者も早速賛成した。
「わたしがうまいものを持つて來て上げませう。」
とお種が言つた。

「え、お種さんが持つて來て呉れる。そりや有難い。」
「少し待つてゐて下さいまし。」
さう云つてお種は家を出たが、やがて歸つて來ると、澤山の柿を一同の前へ出した。
「さあ、あがつて下さい。」
「やあ、こりや思ひがけぬ御馳走だ。」
「お種さんの御馳走ぢや、特別うまからう。」
「いや全くぢや、頂くとしやう。」
忽ち一同の前の柿は一つ殘らず食べられた。
其後も一同の下男達は茶の時になると、お種に柿のことを云ひ出した。其度にお種は何處からか澤山の柿を持つて來た。

不圖一同は不思議に思ひ出した。

「お種さんが持つて來て呉れるんだから、俺は嬉しくつて食べてゐるが、考へて見ると不思議だ、一體何處から持つて來るのだらう。」

「俺もそれを此頃不思議に思つてゐる。」

「今度はつけて行つて見やうか。」

「それがよからう。」

お種はそんな相談が下男達の間に出來たことは少しも知らなかつた。それ故或時も皆の云ふまゝに、柿を取りに家を出掛けた。その後から下男が三人ばかりでつけて行つた。

お種は湯山村の海岸まで來た。そこには大池があつた。お種

はその大池にざんぶと飛び込んだ。

「アッ、お種さんが身を投げた。」

「それ助けろ。」

三人は池の近く驅け寄らうとすると。其時お種は忽ち蛇體となり、スル〳〵と池の上を渡つて、中程にある島に上つた。

「やあ、お種さんが……」

三人は呆然として其姿を見守つた。

お種は島に上ると、島の柿の樹にのろ〳〵と卷き上り、美しい柿を採り始めた。島には多くの柿の樹があつた。

三人の下男は蒼くなつて家に歸つた。そして主人の長者にそのことを話した。一同はそれと聞いて縮み上つた。

お種は自分の正體を知られた爲めか、それ切り歸つて來なかつた。その日から長者の家は段々不仕合になつた。

その村の同じ長者の家のお滿老婆は、お種のことを聞いて不思議に思ひ、村の子供と打ち連れて池の所に行き、持つて來た小餅一斗五升を一個づゝ木の葉にのせて、池のお種龍女に奉納すると、餅は一つ殘らず池の中央に流れ行き、渦卷の中に吸ひ込まれて行つた。

共同の戀人を失つて呆然としてゐた下男達も、村人も、その話を耳にして不思議のことだと話し合つた。

お滿老婆はそれから毎年一度づゝ池に餅を持つて行つた。

或年の旱天にはお滿老婆が村人の依賴で、池のお種龍女に雨

乞をすると、忽ち大雨を降らして呉れた。村人も非常に喜んで數々の奉納物をした。

或年お滿老婆は池の端に行き、奉納物をした後で、

「わたしも大分年老つて、もう足腰も弱つたので、來年は來られるか何うか解りません。どうぞ一生のお別れに、何か不思議を見せて下さりませぬか。」と池に向つて賴んだ。

忽ち四邊の木々には響きが起り、池には五彩の波が立ち、アツと老婆が眼を見張る時、池の中央から太い水柱が立つと、同時に霧の間から美しい龍女の本體が見えた。

「あら有りがたやなあ。」

と思はず老婆は其所に打ち伏して手を合せた。

村人はその話を聞いてから、この池を「種が池」と呼んで、何れも渇仰し、靈池と崇めるやうになつた。

愛姫（伊豫）

或年の或日、穏やかな伊豫國天保山の海岸に桶の中に入つて一人の女が流れて來た。濱の人々は大騒ぎをして女を助け上げた。

女は美しかつた。一目見て誰の目にもそれは都に永く住んでゐた女だと知られた。けれども女の兩腕は斬り取られて無かつた。

「お主は一體何處から來なすつたのぢや。」と一人が訊いた。

「ハイ、都からで御座います。」と女が答へた。

「都から？それにしてはよくまあ此麼小さな桶に乗って來られたものぢや。」
「こゝは何と云ふ所で御座いませう。」
「こゝは伊豫國天保山の海岸ぢや。」
「それなら私の故郷、あゝこんな姿になって故郷に流れつくのも全く罪を犯した罰にちがいない。」
「何？罪を犯したと？それはどうしたと云ふのぢや。」
「ハイ、私は元都にあって、雄略天皇の御寵愛を受けておった者で御座いますが、ふとした出來心から、帝の御恩寵を忘れて禁中に出入りする公達と人知れず契りを結んだので……」
「まあ何と云ふ大それた女子ぢや。」

「ハイ、そのために、その噂が立ちますと、帝のお耳にもそれが入り、いたく御腹立ちで……」
「そりや當り前のことぢや。何と云ふ恐れ多いことぢや。」
「ハイ、その罪で、私は兩の腕を切られて、この桶に入れられて、そして海に流されたので御座います。」
「フム。」
「毎日〳〵、海の上で波と風とにもまれ、今度は死ぬか、今度は波に呑まれるかと思ひながら、今日思はずも此岸につきましたので、どうぞ此上のお慈悲には、何なりとも私に出來る仕事をさして下さりませ。」
「と云って、兩腕なくては何も出來まいが。」

「さあ。」
「困つたものぢや。」
人々は美しい女の顔を眺めてゐたが、美しい女が兩腕持たず、たよる者もない海岸に流れついて今日からの生活に困ると云ふこの有様を見ると、誰も彼も女に同情した。そして何とかしてやり度いと思はぬ者はなかつた。
「やあ好いことがあるわ。」と一人が叫んだ。
「何ぢや、何ぢや。」
「腕がないで、その桶を頭の上に載せるのぢや。そうして漁の手柄のあまり魚を皆でその桶に入れてやるから、それを持つて賣りに行くのぢや、さうすれば一人位の口は暮せるぢやらう。」

「そりや好い思ひつきぢや。」
「早速やるがいゝ。」
女は人々を伏し拜んで喜んだ。
その日から女は桶を頭にのせそれに、漁の手柄のあまり物を無代で入れて貰つては賣りに出た。それを人々は、「おたゝ」と云つた。そして此女が非常に愛らしかつたので、その後伊豫國を愛姫と呼ぶやうになつた。
今も女を祀つた小さな祠が天保山にある。

蛙岩（肥後）

熊本城から北の方へ、四里ばかり離れて、戸塚山と云ふ所がある。其土地の眞中を大きな川が流れて居た。滔々と音をたてゝ流れ行く川の水は、到底人の力では船を漕ぐ事も橋を架ける事も出來なかつた。毎日風の無い穏かな日でも、川波は海のやうに恐ろしい音を立てゝ流れて居た。

正院鄕の長者の娘は、今日も川岸に立つて荒い川波を恨めしさうに眺めて居た。娘は川向の石村長者の若い男を戀して居たのである。

「わたしはもう何日こうやつて、此川岸に立つ事だらう。いつ見ても此川の波は同じやうに恐ろしい音を立てゝ流れて居る。何と云ふ恨めしい川の流れだらう。人の心も知らずに、矢のやうに走つて行く。あゝ、此川さへなければ、わたしはいつでも石村長者のあの人に逢ふことが出來るのに、此川があるばつかりに、わたしは向う岸に行くことが出來ず、たゞこゝに立つて眺めて居るばかり、いつ迄眺めて居たらば、此戀しいわたしの心が滿足されるのだらう。」

娘はいつもと同じやうな嘆を繰り返すのであつた。

石村長者の男も、娘の上を思ふことは娘と同樣であつた。毎日娘と同じやうに、川向うに立つては娘の姿を眺めて日を暮

して居た。

今日も男はやつぱり川向に立つて娘を眺めて居た。男の心にも恨めしいのは流れの早い川であつた。

娘はにつこり笑つて男を見やつた。男も笑ひ返した。娘の乳の下では、心臓が早鐘のやうに音立てた。男戀しさに躍り狂ふ血で、娘の顔は赤くほてつた。

「あゝ。」

娘は耐へ切れぬやうに胸を抑へてうづくまつた。

其時ぽちやんと音がした。

はつと思つて顔を上げた娘の目に、川の流に飛び込んだ蛙の姿が映つた。

「さうだ。」
さう叫んで娘は立ち上がつた。
「此川を越しさへすれば、あの人に逢へる。」
娘はこう思ふと、蛙がいゝことを敎へてくれたと考へた。そして川の面を目がけて身を躍らした。
娘は泳げなかつた。
やがて娘の死骸は川の中で岩になつた。それは蛙の形をしてゐた。
娘の飛び込んだのを見て、川向の男は立ちすくんだまゝ、娘と同じく岩になつた。その岩も蛙の形をしてゐた。
それから永い年月が流れた。男戀しさに岩になつた女の魂は

いつか川の中から男が岩になつて居る川向の丘の上迄上がつて行つた。
土地の人々は此恐ろしい戀の一念をあはれに思つて、女の方の蛙形の岩を女岩と呼び、男の方の蛙形の岩を男岩と呼んで、今でも此夫婦岩の昔語りを折にふれては旅人に話す。